
魔法少女リリカルなのはStrikerS others side

銀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

【Nコード】

N0959Y

【作者名】

銀

【あらすじ】

これは「Strikers」の裏であった戦いの歴史……

ソラト・レイグラントとエドワード・クラウン。
2人の若き戦士から見たJ・S事件。
暗躍するもう1つの影とは？

プロローグ

プロローグ

あの日、失ったのは「絆」。

炎が全てを包み、僕だけが生き残った。

頼る物も、縋る物も無く、孤独という名の闇に飲まれて行った。

幼い僕にとって、その苦痛は大き過ぎた。

この先誰が僕を引き取るかと、この苦しみから逃れる事は出来ない。
そう、思っていた……。

あの日、失ったのは「自分」。

気付けばそこは炎の中で、何故ここにいるのかすら分からなかった。

名前も、正体も、忘却の彼方へ行ってしまった。

残った物は、虚空。

過去無き者に、果たして未来はあるのか……？

差し出された手のひらは、小さいけれど温かくて。
その笑顔は光の如く、闇に包まれた僕を照らした。

「私が友達になれば、貴方はもう独りじゃなくなるよ」

女神にも見えた少女は、僕を孤独から救ってくれた。
以来、彼女は僕の全てとなった。

例えば世界が君の敵だとしても、僕が君の騎士となる。
その時の気持ちと決意は、今も変わらない。

ある日、美しき醜さを背負った少女と出会った。

「記憶が戻ったとしても、貴方は貴方よ」

彼女は名も無き俺を受け入れた。俺も彼女の全てを受け入れたい。
やがて家族と呼べる大切な者達が出来た。

偽りでもいい。家族や、彼女と共に俺の時間を作って行きたい。
皆を想う気持ちは、虚空でも偽りでも無いのだから。

彼女と、彼女の笑顔を

家族、そして掛け替えの無い今を

守り抜く、必ず……。

これは、J・S事件の記録の裏で戦った戦士達の話

魔法少女リリカルなのはStrikers others side
e 始まります。

登場人物説明

ソラト・レイグラント

近代ベルカ式、魔導師ランク陸戦A+

魔力光：青緑

階級：陸曹、所属：陸士103部隊

使用デバイスは大剣型アームドデバイス「セラフィム」

イメージCV：福山潤

16歳。金髪、蒼眼の少年。主人公の1人。

性格は誠実で礼儀正しいので女性から人気が高い。だが、スバルの幼馴染兼恋人で昔の出来事より、スバル一筋^{バカ}である。ナカジマ家とは昔から家族ぐるみの付き合い。

決め台詞：「鎮魂歌^{レクイエム}は歌い終わりましたか？」

イメージテーマ：ELEMENTS/RIDER CHIPS
eating Ricky

セラフィム

ソラト・レイグラントの使用するアームドデバイス。待機形態は緑色の宝石。

「ブレイドフォルム」

通常形態。大剣型。

「ウイングフォルム」

フォルムツヴァイ。刀身や鍔から噴出口が出て、ホバー機能が付く。足に自動浮遊魔法が付き、地上から1mまで浮ける。滑るように移動するので速さはマッハキャリバー並。

「サークレッドフォルム」

フルドライブ。柄の両側に刃がある。

背中に8枚の魔力の羽型の自動飛行魔法を付与させる。空域制限は無いが、速度はフォルムツヴァイより遅い。

ソラトの使用魔法

「デイベインバスター」

砲撃魔法。なのはのデイベインバスターを自己流に習得。ソラト版は斬撃波タイプになっている。

掛け声は「閃空裂波！」

「セブンスヘブン」

砲撃魔法。ソラトの最強魔法。7本の砲撃を放つ。集束、拡散両方使用可能。

「ホーリーレイド」

移動魔法。移動距離は短いが瞬間的に相手の懐に入る強襲用の魔法。そこから斬りつけるのが普通だが、グランドクロスに繋げることもある。

「アセンションランス」

射撃魔法。相手の頭上から何十本もの魔力槍を落とす。殺傷能力設定なら貫通も可。

「グランドクロス」

魔力付与攻撃。十字を斬る技。一撃目を防いでも、隙が出来るため二撃目は必ず当たる。

エドワード・クラウン

ミッドチルダ式、魔導師ランク陸戦AA+

魔力光：藍色

階級：陸曹長、所属：陸士108部隊

使用デバイスはライフル型インテリジェントデバイス「ブレイブアサルト」

イメージCV：野島健児

17歳。黒髪、藍眼の青年。主人公の1人。

性格は寡黙だが皆のいい兄貴分。自己主張は普段しないのでたまにするとそれがすんなり通ることがある。ギンガと恋人同士。通称「エド（兄）」。

実は10歳以前の記憶が無い。本人はその事について気に掛けてるものの今が大切だと思っている。

決め台詞：「……撃ち墜とす」

イメージテーマ：The people with no name / RIDER CHIPS Featuring m.c.A・T

ブレイブアサルト

エドワード・クラウンの使用するインテリジェントデバイス。待機形態は腕輪。

「シュートフォーム」

通常形態。ライフル型。

「ショットフォーム」

モード2。片手銃型。シューティングアーツとの組み合わせで近接戦闘も可能。

「バーストフォーム」

フルドライブ。バズーカ型。

エドワードの使用魔法

「フォルテバースト」

射撃魔法。移動しながら撃てるが少し溜める。

「テラフレイムブレイカー」

砲撃魔法。溜めて使用するので威力は高い。ただし、3発しか撃てない。

「ネットバレット」

捕獲魔法。当たれば、全身を網のようなバインドで縛る魔力弾を撃つ。

「ブラスタースマッシュ」

射撃魔法。まず相手に円錐状の魔力弾を撃つ。そこに目掛けて飛び蹴りをし、魔力弾と共にドリルの様に相手を貫く。モード2専用。

「エアアデストロイヤー」

砲撃魔法。エドワードの最強魔法。フルドライブ専用。威力は高いがその為、周りを巻き込む恐れがある。

ラウム・ヴァンガード

近代ベルカ式、魔導師ランク陸戦S

魔力光：赤色

階級：二等陸佐、所属：陸士315部隊

使用デバイスは三叉槍型アームドデバイス「ガーゴイル」

イメージCV：佐々木望

18歳。紺髪、赤眼の青年。

性格は生真面目で一言で表すと漢^{おこい}。聖王教会出身。訓練校ではエドワードとペアで親友だった。何故か時に天然になる。

決め台詞：「悪しき魂、天へ昇れ。」

イメージテーマ：EGO eyes grazing over
／ICHIDAI

ガーゴイル

ラウム・ヴァンガードが使用するアームドデバイス。待機形態は懐中時計。

「ダークフォルム」
通常形態。三叉槍型。

ラウムの使用魔法

「バズズストライク」

魔力付与攻撃。突き技。チャージする必要があるが、結界をも砕く一撃必殺。

「ワイバーンスパイク」

射撃魔法。槍での突きを飛ばす魔法。

「ウロボロスブレイク」

魔力付与攻撃。上から一閃、斬り裂く技。

シビック・ラグレイト

近代ベルカ式、魔導師ランク陸戦A+

魔力光：紺色

階級：陸曹、所属：陸士103部隊

使用デバイスは手甲型アームドデバイス「フロズヴィトニル」

イメージCV：神谷浩二

16歳。白髪、紺眼の少年。

陸士103部隊所属で、ソラトを一方的に好敵手視している。模擬戦でソラトに勝てた事がない。

性格は冷静だが情緒不安定。プライドが高く自身を邪魔する者には容赦しない。

「…かな？」が口癖。提督になるという夢がある。

主に冷氣系の魔法を使うが、魔力変換資質ではない。

アームドデバイス「フロズヴィトニル」

シビック・ラグレイトが使用するアームドデバイス。普段は銀色の

アクセサリ。

「フロストフォーム」

通常形態。手甲型。両手用。それぞれ5本の爪が付いている。

シビツクの使用魔法

「クリスタルクロウ」

魔力付与攻撃。冷気を宿した爪を逆さに構えて相手を突き刺した後倒し、そのまま引き摺る。最後は冷気と共に相手を引っ掻き飛ばす大技。

「フリーズスクラッチ」

射撃魔法。氷の爪を相手に飛ばす。

マルバス・マラネロ

イメージCV：チヨ

ジェイル・スカリエッティに協力する、正体、目的不明の謎の科学者。眼鏡を掛け、白衣を着ており、薄緑色の髪を結わえている。のりくらりとした性格で、人を小馬鹿にした様な話し方をする。反面、人の命をどうとも思っておらず、使えない物は切り捨てる冷酷さを持っている。

謎の少年の頼み（本人の興味もある）でソラトの戦闘データを集めている。

ガジェットを改造したり、人造魔導師を生み出したりとその知能はスカリエッティに匹敵する。

ノーヴェはマラネロとスカリエッティの共同開発で作られた。（クイントの遺伝子提供）

デュトロ・コンマース

近代ベルカ式

魔力光：黄緑

使用する武器は剣型の固有武装「エリミネーター」

イメージCV：吉野裕行

黒いボサボサした髪、蛍光グリーンの眼の青年。

人造魔導師。ただ暴れる事のみを考えている。破壊と殺戮と混乱を楽しむ狂暴な性格。知能は高くない。一応マラネロの命令は聞く。J・S事件におけるマラネロが送った協力者。ナンバースと謎の少年が嫌い。ソラトを面白い獲物と考えている。謎の少年からはソラトを殺すなど言われているが、隙あらば狙っている。

固有武装「エリミネーター」

S字状の剣。特殊能力は付いていない。

デュトロの使用魔法

「スローターエッジ」

剣から光の刃を飛ばす。射程はあまり長くない。

アトレー・ハイゼット

近代ベルカ式

魔力光：群青色

使用デバイスは籠手型非人格アームデバイス「イリス」

イメージCV：清川元夢

38歳。茶髪にダークグレーの眼の男性。常に自分が正しいとしている自己中心的な人物。

賞金稼ぎ擬いの囑託魔道師。息子が一人いる。
地上本部長に雇われ、公開意見陳述会時の護衛として参加した。

アームドデバイス「イリス」
籠手型の非人格デバイス。

IRIS II Individual Rebel Interse-
p
t-Systemの略。

アトレーが管理局に作らせた。

現段階ではまだ未完成。なので、限界使用時間は30分と定められている。

手の平に合わせる事で魔力を読み取り「Ready」という電子音の後セットアップと唱え、「Rise up」という電子音と共に起動する。

起動後、白い鎧の様なBJを纏う。ベルトにイリス本体が付いていて、取り外す事が出来る。

イリス本体の他、剣型非人格ストレージデバイス「イリスカリバー」で攻撃する。

魔法やイリスカリバーの管理は、イリスに仕組まれたコンピュータが統制している。人格が無いのは暴走を防ぐため。

元ネタは「仮面ライダーキバ」より仮面ライダーイクサ。

第1話 F o u r m e m o r i e s

新暦75年―運用期間が僅か1年間の実験部隊、機動六課が設立されました。

後に僕らも大きく関わる事になる事件の解決を目的とした部隊。今日、そこに僕の大切な人が配属されます。

「大丈夫だよね、スバル」

ここから、僕達の話が始まります。

魔法少女リリカルなのは S t r i k e r S o t h e r s s i d e

第1話 F o u r m e m o r i e s

陸士108部隊隊舎にある談話室。そこに現在3人の男女がいた。話題に上がっているのは1人の少女と、ある部隊について。

「今日からだね、機動六課」

金髪の少年、ソラト・レイグラントが彼の兄貴分、姉貴分に話す。

「不安か？ギンガ」

「少しね。けど、あの子も局員になってもう2年だから」

問い掛ける黒髪の男性、エドワード・クラウンに紫の長髪の女性、ギンガ・ナカジマが笑顔で返す。
だが、内心ではかなり心配していた。

「……そうか」

それを察したのか、エドワードは小さく頷いた。
この2人、実は付き合っているのだ。

「スバル、元気かなあ。最後に会ったのは2カ月前だし……。夏になったらまた4人で海行こう！」

話題に上がっている少女、スバル・ナカジマはギンガの妹で、ソラトの幼なじみ兼恋人でもある。
故に3人は仲が良く、エドワードを含めてもこうした思い出は少ない。

「そうそう、去年はエド兄がギン姉に海に落とされたっけ」

4人での楽しい思い出に更ける弟を、2人は微笑みながら見ていた。

怪しげな研究室の中、1人の白衣を着た男が、モニター越しに誰かと話していた。

男の顔は影に隠れていて見えないが、話し相手は紫髪のこれまた白衣を着た男だった。

この男こそ、指名手配中の広域次元犯罪者、ジェイル・スカリエツティである。

「少し、君の人形を借りたいんだけどいいかな？」

「どうぞご自由に。でも何に使うんだい？」

「ちょーっと調べたい事があるみたいなんだよね、彼が」

男がそう言つと、奥の方から1人の少年が歩いて来た。

「ほう……。だが計画の邪魔になるような事だけは止めてくれよ」

不敵に笑い、スカリエツティは通信を切った。

「さて、テストの時間だよ」

男がボタンを押すと、5つの楕円形の機械が動き出した。

ここで、ずっと無表情（若干イラついた感じ）だった少年が口を開く。

「こんなガラクタで、データが取れんのか？」

「今回不十分でも幾らかまだ時間はある。まあ気軽に見ましょ。ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

高笑いする男を、少年はますます不機嫌そうに睨む。

だが、何でもいいと呟き、また機械に目をやった。

「そうだ、スバルBランク試験に受かったんだって？」

「ええ。相棒の子も受かったみたいで喜んでたわ」

スバルの相棒、ティアナ・ランスターについてソラトは聞いてはいなかった。だが、会った事は無いのでどんな人物か気になっていた。

「そのティアナもスバルと同じスターズ分隊所属だそうだ」

「しかも上司があの子の憧れの高町なのは！だから浮かれちゃって……」

高町なのは。その名前を聞いた途端ソラトの表情が険しくなった。

「ごめん、2人共。僕ちよつと訓練場行ってくる」

急に立ち上がり、その場を去る。

突然豹変したソラトに、ギンガは目を点にした。

「私、何か変な事言った？」

恐る恐るエドワードに聞くと、心配いらなといった感じで首を横

に振った。

「高町なのははスバルの恩人であり、憧れの人物。あいつはそれに嫉妬しているんだ。いつかなのはさんを越える。そう言ってな」

「ああ、あの空港火災の時の」

その件に関して、ギンガはよく知っていた。というより、その場にあった。

ギンガ本人は別の人物に助けられたのだが、スバルがよく話していたのだ。

「……ところで、エドは嫉妬しないの？」

「……今ギンガがここにいて、俺が守ってやれる。それで十分だ」

「何か、どうでもいいみたいね」

「そついう訳じゃ……」

焦りながら弁論しようとするエドワードに、ギンガは甘える様に抱き付いた。

「でも、嬉しいわよ」

「……………」

一本取られた、と苦笑しつつもギンガの頭を撫でるエドワード。

このまま、2人の時間が過ぎて行った。

陸士103部隊訓練場。ソラトは大剣型のデバイスを振り、ターゲットを斬っていた。

因みに、本来ソラトは103部隊所属なのだ。

「なのはさんを越える！スバルを守るのは僕だけでいいんだ！」

全てのターゲットを斬り、一旦手を休める。

突然、周囲からガサガサと音が鳴った。

何かいる。ソラトは再びデバイスを構え警戒した。

「……出て来なよ」

草叢から出て来たのは楕円形の機械。通称ガジェット・ドローン。横から出ている触手がまるで誘っているかの様に動いている。

『全部で5体か……。正面から片付ける！』

正面のガジェットに向かって走り、剣を振った。が、簡単に受け止められてしまう。

パキィ！

「あっ！？」

途端、なんと他の触手で刀身を折られてしまった。

ソラトは慌てて後退した。

「あーあ、ドミニオン折られちゃった……」

ドミニオン。そう呼ばれた非人格アームドデバイスを残念そうに見るソラト。

「仕方無い、後で直すか」

折れた剣を地面に置き、左胸のポケットから青緑色の宝石を取り出す。

宝石を持った右手を前に突き出した後、ゆっくりと腕を捻りながら左側へ移す。

「セットアップ！」

そして、発声すると同時に右手首を180°回転させる。

〔S t a n d i n g b y〕

すると、宝石から青緑色の帯が何本も出て来てソラトを覆った。やがて中から青緑色のラインが入った黒いシャツと白い半袖の上着、灰色のズボンを履いたソラトが出て来た。その手には、先程のドミニオンとはまったく違う大剣型アームドデバイス、セラフィムが握られている。

「機械に言つのも何だけど……」

ふわふわと浮いているガジェットに、笑顔でセラフィムの切っ先を向ける。

「鎮魂歌は歌い終わった？」

決め台詞と共に、ソラトは近くにいた1体を軽く斬り捨てた。

[Holy raid]

真つ二つに裂かれたガジェットが爆発する前にソラトは体に魔力を纏う。

それに気付かず、1体倒された事により、襲い掛かってくるガジェット達。

しかし一瞬で間合いを詰められ、あっという間に2体目が斬られた。一応ガジェットにはAMFという魔力を無効化する物があるのだが、ソラトは瞬間移動しているので無効化する前に倒されてしまう。

「けど、やっぱり連続使用は無理か」

他のガジェットのAMF領域内に入っているので発動出来ないのだ。

それでもソラトは只の斬撃で潰して行つた。

触手で反撃しようとしても、触手ごと斬られ敢えなく倒される。

最後の1体になった所で、ガジェットが逃げて行く。

それを逃がしてやる程、ソラトは愚かではなかった。

「閃空烈波！」

ソラトはセラフィムを右から背負う様に構え、カートリッジを一発炸裂させる。

足元にベルカ式魔法陣、目の前にはガジェットに被せる様に魔力スフィアを発生させる。

「デイベインバスターー！！」

スフィアを大きく斬ると、巨大な斬撃波となりガジェットに向かう。AMFとぶつかるも、少し止めただけでやはり他と同じ末路を辿る事になった。

「……始末書書かなきゃ」

セラフィムを待機形態に戻し、ソラトは自室に戻って行くのだった。

「まずはこんな物だね」

楽しそうに機械をいじる白衣の男。その後ろで、少年はガジェットが送っていた映像を見ていた。

やがて、また不機嫌そうに研究室を出ようとする。

「もったいいのかい？」

「不十分だ。あんたの言う次回を待たさ」

少年が出て行っても、男は気にせず機械に没頭した。

「……次は、スカリエッティを利用させてもらおうかな。ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

その夜、ソラトは自室の机に飾ってある写真を眺めていた。

幼き日にスバル、ギンガと撮った物、エドワードを加え4人で撮った物。

そしてスバル1人だけの物。その1枚を手取る。

「スバル……」

小さく呟いた少年の声は、夜の空へと消えて行く。

想う少女との悲しき再会を、彼はまだ知らない。

今は4人だけの思い出の中で。

次回予告

エドワード「108部隊と103部隊が六課に協力する事になった」

ギンガ「それに伴い、作ってもらった私の新しい相棒。試運転、付き合ってくれる？」

エドワード&ギンガ「次回 魔法少女リリカルなのはStrike
rs others side 第2話 兄と姉と弟と」

エドワード「本家、シューティングアーツか」

第2話 兄と姉と弟と

機動六課オフィス。フォワード陣が訓練をしている間も内勤組はここで仕事をしている。

そんな中、眼鏡を掛けた青年、グリフィス・ロウランが誰か足りない事に気付いた。

「あれ、シャーリーは何処に行った？」

「リイン曹長に呼ばれて行きましたよ」

グリフィスの疑問に、通信士のルキノ・リリエが答える。

「新人達のデバイス調整ならもう終わった筈だけど」

ついこの前、そのデバイスを新人達に渡し今も訓練で使っている。グリフィスは首を傾げながら、まあいいかとまた自分の仕事に戻った。

その頃メカニックルームでは、1人の女性がキーボードを打っていた。

「急に呼び出してごめんなさいです、シャーリー」

「いいですって。半分趣味みたいな物ですし」

1人しかいない筈なのに、2人分の声が聞こえる。実はもう1人机の上におり、女性で隠れて見えなかったのだ。

その身長30センチ程の少女、リインフォース？に眼鏡を掛けた長髪の女性、シャリーことシャリオ・フィニーノが笑い掛けた。

「でも姉妹機かぁ。腕が鳴りますね！」

そのモニターには、紫色の宝石と白いローラーブーツが映し出されていた。

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第2話 兄と姉と弟と

その前日の朝、エドワードとギンガは食堂で朝食を取っていた。

「そつえば、今日八神二佐が来るんですって」

「……恐らく108部隊と103部隊に捜査協力を申請する為だな。」

103部隊には明日辺りか」

以前、六課部隊長である八神はやては陸士108部隊で指揮官研修をした事がある。ので、この2人に限らず108部隊の面々とは顔見知りだったりする。

「八神二佐にはよろしく言っておいてくれ」

「え、会わないの？」

「今日は旧友と会う約束をしているんだ」

エドワードには記憶が無い。旧友というのは訓練校時代の友人だろう。

エドワードの少ない記憶の中で唯一その時の事を知らないギンガは興味津々だ。

「何々？どんな人？格好良い？もしかして……女の人？」

表情をコロコロ変える質問モードのギンガを、ため息混じりで撫でて落ち着かせるエドワード。

「男だ。名前だけなら聞いた事くらいあるだろう。奴は……」

数時間後、はやてとその副官リインフォース？がやって来た。

はやては案内役に連れられて部隊長室に、リインはお茶を汲みに給湯室へそれぞれ向かった。

だが、給湯室には先客がいた。

「あ、リイン曹長」

そう、ギンガだ。はやて達が来たと聞いてお茶の準備をしていたのだ。

「ギンガ！お久しぶりです〜！」

嬉しそうに飛んでいくリイン。

「エドは元気ですか？」

「はい。よろしく言っておいてくれ、と」

「あれ？ここにはいないですか？」

「今日は旧友に会いに行くと言っていました。それですね、その旧友というのがすごい人物なんですよ！」

「誰ですか？」

「ふふつ、実は……」

所変わってクラナガンの喫茶店。2人の男が話していた。と言ってもお互い寡黙な為、周りから見たら異様な光景になっているが。

「久しぶりだな、エド」

「ああ、ラウム」

紺髪の青年、ラウム・ヴァンガードが漸く口を開き、エドワードが簡潔に答える。

「しかし、二等陸佐殿がこんな所にいていいのか？」

「急に差が出来たから僻んでいるのか？」

「まさか。俺はそんな物に興味は無い」

この2人、訓練校ではペアを組んでいたのだが、卒業後はバラバラになった。

その後、ラウムは急な昇進で現在、二等陸佐という地位を得たので有名になったのだ。

「良い物ではないぞ。急な昇進なんて物は」

それだけ言つと、これ以上何も言いたくないという感じでコーヒーを飲んだ。

エドワードもそれを察し、話題を変える。

「お前も早く彼女を作れ」

「……自慢か？」

「違う。お前にも支えが必要だと思っただけだ」

苦笑していたラウムだが表情が一変した。

「俺は「罪人」だからな。それに、今はいなくてもいい」

端から見ればかなり分かり難いが、ラウムはどこか悲しそうな表情をしていた。

「それよりも俺はお前等が心配だ」

「何がだ？」

「地上部隊で話題に上がっている機動六課。そこにお前の妹がいると聞いてな」

「正式には俺の恋人の妹だ」

コーヒーを飲みながら静かに訂正するエドワード。

「嫌な予感がする。近々何かが起こるぞ」

「……………」

長い沈黙の後、互いにコーヒーを飲み干す。

「何があっても俺はギンガを守る。スバルにはソラトもいるしな。」

「ソラト……ああ、お前の弟か」

「正式には俺の恋人の妹の恋人だ」

数日後、108部隊に1機のデバイスが送られて来た。

「これが、私の新しいデバイス」

ギンガの手にある物、それは紫色の宝石だった。名をブリッツキャリバーと言う。

「それじゃ、早速データを取るわね」

108部隊のメカニックがブリッツキャリバーを受け取るうとする
と、ギンガは制止した。

「どうせだつたら、実戦の方がいいデータを取れるわよね？」

「ええ、まあ……………」

「私も試運転してみたいし。エド、協力してくれる？」

急に話を振られ、一瞬戸惑ったがやがていつもの調子で

「いいだろう」

了承した。

これから始まる模擬戦にソラトは少し緊張していた。

「エド兄ー、ギン姉ー、頑張れー！」

弟分の応援に笑って答える2人。

「セラフイム、後でスバルに送るからしっかり撮っておいてね」
「分かりました」

一方、これから戦う2人は緊張の色を見せない。

「言っとくけど、手加減なんてしないでね」

「ああ。悪いが撃ち墜とさせてもらう」

そう言ってエドワードは両腕を左腕の上に交差させて前へ突き出した。

そのまま右腕を内側へ入れる様に腕を回し、胸の前へ持って来る。

「セットアップ」

「Standing by」

すると、左腕の腕輪が光り出し藍色の帯が現れエドワードを包む。
そして中から赤いシャツの上に、黒地に赤いラインが入ったスーツ、
青いズボンと右手にライフル、ブレイブアサルトを持ったエドワー
ドが現れた。

ギンガの方もBJを着用し終わっている。

「調子はどうだ？」

「うん、良い感じ」

「じゃ、始めるか」

エドワードは通信でゲンヤに合図を出す。それと同時にシグナルが
青へと変わった。

真っ先にエドワードは地面に乱射。砂煙を煙幕にして姿を眩ました。

『エドは中、遠距離タイプだから接近戦に持ち込めば！』

そう考えたギンガはウイングロードを出し空から行こうとした。

「墜ちろ」

だが、何処からか魔力弾が飛んで来てウイングロードが破壊された。

「……？」

破壊したウイングロードにギンガが乗っていれば落下音が聞こえる

筈。それが一向に聞こえない。

「まさか!？」

「見つけたあ！」

気付いた時にはギンガはもう後ろにいた。

そう、ギンガはウイングロードを囷にエドワードの居場所を割り出したのだ。

左から繰り出される拳を銃身で受け止めるエドワード。

しかし、銃の形状が先程とは違う。それにギンガが気付いたのは数瞬後で、

「はっ！」

少し遅かった。ブレイブアサルトはライフルから片手銃へと変化していたのだ。

だからこんな短い距離でも問題無く撃てる。

[Protection]

そこにブリッツキャリバーが自動でプロテクションを張り、ギリギリ魔力弾を防ぐ。

咄嗟にギンガは柱に隠れた。

「ごめん、ブリッツキャリバー」

「お気にせず」

己の不注意を謝るギンガに、それを宥めるブリッツキャリバー。

早くも良い相棒関係が出来ていた。

「そろそろ、いいな」

エドワードはブレイブアサルトをライフルに戻し、片手で前へ構え、カートリッジを1発消費。
ギンガが隠れている柱をロックオンし、足元に魔法陣、銃口に魔力スフィアを出現させる。

「フォルテバースト！」

トリガーを引き、勢い良く魔力が放たれた。

それは柱ごとギンガに命中し、吹き飛ばす。
最後に砂塵が舞い、中には倒れているギンガ。

「勝負アリ、だな」

ゲンヤのアナウンスと共にこの日の模擬戦は終了した。

「もう、いきなり撃つなんて酷いじゃない！」

あの後メカニックは良いデータが取れた、と喜んでいたが、ギンガに怒られるエドワードの姿があった。

「手加減するなと言ったのはギンガだ」

「そっという問題じゃない！」

口では勝てそうもないらしい。ソラトに助けを求めるも流されてしまった。

仕方なくエドワードは切り札を出す事にした。

「なら詫びにアイス買ってやるから、許してくれるか？」

「……許す」

アイスを作った人は偉大だとエドワードは思った。

そんな兄と姉のやりとりをやれやれといった感じでソラトは見ていた。

これも平和な日常の一時。

それが壊されるのは、そう遠くはない。

次回予告

ヴァイス「あのミスショット以来ティアナが無茶やってるな。何でか放っておけないんだよなあ」

アルト「ええっ！？怒ったのはさんがティアナを撃墜！？大丈夫かなあ……？」

ヴァイス&アルト「次回 魔法少女リリカルなのはStrike
rS o t h e r s s i d e 第3話 心配する人される人」

シャーリー「皆不器用すぎだよ……。もう見てられない！」

第3話 心配する人される人

ホテルアグスタ襲撃事件後、ヴァイスはいつも通りヘリの整備をしていた。

スコープの調節のため、ふと近くの森を覗いていたら、数個の光が見えた。

気になり、ズームをしてみると、そこにいたのは訓練中のティアナだった。見えた光は訓練用のスフィアの様だ。

「……頑張るねえ」

ヴァイスは今日何があつたかを知っていた。

ティアナがミスショットをした事、それがスバルに当たりそうになった事、それでヴィータに叱られた事、なのはから話を受けた事。青い青いと眩き、ヴァイスはヘリの整備へ戻った。

この時、ヴァイスはティアナがすぐに帰るだろうと考えていた。

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第3話 心配する人される人

4時間後、勤務を終え自室へ戻ろうとするヴァイス。

だが、流石にいないだろうと思いつつも気になり、スコープを覗く。そしてヴァイスは驚愕した。

ティアナはまだ訓練していたのだ。つまり、4時間以上訓練しっぱなしだという事になる。

「あんのバカは……」

頭を掻き、ため息を吐く。新人達には知られていないが、ヴァイスは昔武装隊でエース級のスナイパーと呼ばれていた。しかし、一度大きなミスショットを犯し、武装隊を辞めた。だからティアナの気持ちは痛いほど分かるのだ。

やはり心配になり、ヴァイスはティアナの所へ向かう事にした。

「……………」

すぐには声をかけず、木に寄り掛かり見守る。当のティアナはヴァイスが来た事に気付いていない。それ程までに訓練に集中しているという事か。

『俺なんかと比べると、随分とマシな方だと思うけどな』

被害も出さずに済んだ。それなのにここまで必死になるティアナが分からなかった。

「っ!!」

などと考えていると、とうとうティアナが躓いて座り込んでしまった。だが立ち上がり、また訓練を続けようとする。

限界だな。ここまで頑張った事を讃えヴァイスは拍手をする。その音にティアナは漸くヴァイスがいる事に気付いた。

「もう4時間も続けてるぜ。いい加減倒れるぞ」

「ヴァイス陸曹。……見てたんですか？」

「ヘリの整備中にスコープでチラチラとな。ミスショットが悔しいのは分かるけどよ、精密射撃なんざそうホイホイと上手くなるもんじゃねえし。無理な詰め込みで変な癖を付けるのも良くねえぞ」

淡々と喋るヴァイスの話をしばらく黙って聞いていたティアナだったが、素人が偉そうに言うなという反発と、素人の割に詳し過ぎるという疑念からキツと睨み付けた。

ティアナの目付きに、喋り過ぎた事に気付いたヴァイスは咄嗟に言い訳を考える。

「……って、昔なのはさんが言ってたんだよ。俺はなのはさんやシグナム姉さん達とは割と古い付き合いでな」

苦しい言い訳だった。特に、勘の鋭いティアナにはあまり効果はなかった。

この人、何か隠している。けど今は無駄な詮索をする余裕はなく、一先ず納得する事にした。

「それでも、詰め込んで練習しないと上手くならないんです。凡人なもので」

そう言い、ヴァイスに背を向けティアナは再び訓練を始めた。

凡人。その言葉でヴァイスはティアナが必死になっている理由が大分分かった。

「凡人か……。俺からすりゃあ、お前は十分優秀なんだがな。羨ましいくらいだ」

最後は皮肉混じりだったが、これは本心だった。あんなミスを犯した自分なんかと比べたら……。

しかし、ティアナは聞いていない様だ。これ以上は無駄か、と悟り大きくため息を吐く。

「はあ……。ま、邪魔する気はねえけどよ、お前等は体が資本なんだ。体調には気い使えよ」

「ありがとうございます。大丈夫ですから」

何処までも頑固なティアナに、ヴァイスはやれやれといった様子で首を振った。

『全然大丈夫に見えねえんだけどな』

それから数日間、ティアナは相棒のスバルと共に訓練に明け暮れた。なのはとの模擬戦に2人で勝ち、自分が誰かを守れる事を証明する

ために、そして……。

模擬戦前日になると、六課内はその話で持ちきりになった。ロングアーチ内も例外ではなく、シャリオ・フィニーノは少々心配を抱えていた。

「いよいよ明日ね。ティアナ、大丈夫かしら」

シャリオが他の2人、アルト・クラエッタとルキノ・リリエに話し掛ける。すると、どうやら2人もティアナが心配な様だった。

「最近相当無理して来たみたいですし」

「無茶な事しなければいいんですけど……」

無茶な事、といえば嫌な出来事がシャリオの脳裏を過った。もしティアナがそんな事をすれば、なのはは黙っていない。

「気持ちは分かるんだけどね」

「気持ちってどういう事ですか？」

「ティアナ、お兄さんがいたのよ。でも……」

シャリオはティアナの兄、ティーダ・ランスターの話をしだした。

「……なるほどな」

オフィスの影で、ヴァイスもシャリオの話を聞いていた。これで漸くティアナの行動に納得したのである。

「アイツ、本当に大丈夫か……？」

そして、皆の心配は現実の物になった。

模擬戦の結果は2人とも撃墜。特にティアナは外傷はないものの、昏倒して医務室に運ばれたのだった。

その時の様子をモニターで見ていたロングアーチ陣はただ、呆然としていた。

シャリオを除いては。

「ティアナ……やっぱり無茶しちゃったのね」

途端、シャリオは何かのデータをまとめ始めた。その様子を見たアルトとルキノは不思議そうな顔をする。

「どうしたんだろ、シャリーさん」

「急にあんな真剣な顔をして……。何かまとめるみたいだけど」

思い当たる節があるのだろうか。とにかく、今は邪魔しないで置く事にした。

「私、ティアナの様子見てくる」

アルトが席を立ち、オフィスを後にする。残ったルキノには、事が早く治まるよう願うしか出来なかった。

医務室へ向かうと、アルトは医務室前に誰かいるのに気付いた。

「ちっ、ティアナの奴……」

聞き慣れた、悔しそうな男性の声。その声の主は、ヴァイスだった。見舞いに行った所、面会謝絶だったらしい。

「無茶しやがって。俺が早く止めていりゃあよ！」

ドン！

怒りに任せて壁を叩く。ヴァイスがちよくちよく訓練中のティアナの様子を見に行っていたのをアルトは知っていた。

ヴァイスの所為ではないと言おうとするが、止めて戻ることにした。彼に今そんな言葉を掛けても慰めにもならないと思ったからだ。

因みに数分後、壁を叩いた事でヴァイスがシャマルに叱られたそう
な。

夜、隊舎内にアラートが響き渡り、隊長陣がヘリポートで出撃準備をしている間、シャリオは漸くデータをまとめあげた。

「出来たですか、シャーリー」

そこへ、リインフォース？が話し掛けて来た。何をまとめていたかは知っている様だ。

「はい。なんとか」

「じゃあ早く行ってあげて下さいです」

「え、でも持ち場が」

「リインが代わりにやるから大丈夫です。だから、ティアナ達にちゃんと説明してあげるです」

「リイン曹長……。ありがとうございます」

リインに一礼して、ヘリポートへ向かうシャリオ。

その後ろ姿に、アルトとルキノは小さく頑張っして下さいと言った。

シャリオがティアナ達に説明した事、それはなのはの過去、その経験から来る教導の真の意味だった。

全てを理解したティアナとなのはが和解した翌日、ティアナはヴァイスの元を訪れていた。

「ありがとうございます」

「俺は何もしてねえぞ」

「でも、すごい心配してたってアルトさんが」

「ほう……」

アルトの奴、後で殴る。ヴァイスは心の中で誓った。そしてふっと笑い、ティアナの頭を撫でる。

「ま、大事にならなくて良かったじゃねえか。もう心配掛けさせん

なよ」

最初はドキツとしたが、素直に撫でられ、頬を染めるティアナ。けど慣れないためか、ツンとした態度を取ってしまう。

「……分かってます」

「よし、話は終わりだ。お前もそろそろ戻れよ」

そう言つて、ヴァイスはすくつと立つとヘリの方へ向かった。

だが、ティアナの中にはまだ一つ小さな疑問が残っていた。

この時、既に少女の心には彼がいたのかもしれない。

次回予告

ソラト「仕事中に気になったロストログア、レリック。調べてみたら……これは！」

エドワード「ある事故の調査中发现した見慣れぬ物。何故こんな物が……？」

ソラト&エドワード「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 第4話 レリック」

エドワード「事態が、急変しそうだな」

第4話 レリック

朝、陸士103部隊オフィスの一角。楽しそうな話し声が聞こえる。ソラトが久々にスバルと携帯で話していたのだ。

「それで、今日は私のパートナーと出掛けるんだけど、ソラトも一緒にどう？」

「ごめん、僕はまだ仕事なんだ」

「あ……ごめん」

「うっん、気にしないで。楽しんで来てね」

「……うん、ありがとう」

「じゃ、またね」

携帯を切り、小さくため息を吐くソラト。

余程残念だったのか、デスクに携帯を置くと、そのまま突っ伏してしまった。

「スバル……最後に会ったのは約1年前か……」

顔を横に向け、視線の先にあるのはデスクに飾ってある2人で撮った写真。

起き上がり、今度は天井を見つめるソラト。

だが、急に首を横に振る。

「こんな事じゃ、なのはさんを越えられない！いつかまた会えるんだ！」

自分に言い聞かせる様に言った後、仕事を再開させる。
愛しい彼女に会える日を待ちながら。

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第4話 レリック

一方、六課の車庫。ティアナが街へ出掛ける為のバイクを、ヴァイスに借りに来ていた。

「貸すのはいいけど、壊すなよ。プロテクターは？」

「自前のオートバリアです」

ヴァイスはバイクをチェックしながら、何気なく最近のティアナの様子を口に出した。

「しかし何だな。俺は時々お前等の訓練とか、見るんだけどよ。最近お前立ち回りがちよつと変わったよな？」

「は、はい」

「お前、今まではシングルでもチームでもコンビでも、動きが全部

同じだったけどよ。最近は大分臨機応変になってきてるように見えるぜ。センターらしい動きになってきたんじゃないか？」
「皆さんのご指導のお陰で」

ヴァイスの話を聞いて、やはり詳しすぎる事に疑問が再燃するティアナ。

その反面、理由は分からないが嬉しくなったりもしていた。

「よし、いい調子だ。ほれっ」

バイクの確認を済ませたヴァイスは、ティアナにキーを投げ渡す。

「はいっ」

ティアナはキーを受け取り、笑顔で答えた。

「あの、これ、聞いちゃいけない事だったら申し訳ないんですけど

……」

「?」

先程の事もあり、バイクに跨り、ヘルメットを装着しながら、以前から頭の片隅に残っていた疑問をふと聞いてみる。

「ヴァイス陸曹って魔導師経験ありますよね？」

急な質問に驚いたものの、ヴァイスはいつもの軽い調子で答える。

「……まあ俺は武装隊の出だからな。ド新人相手に説教くられる

程度にゃよ」

ティアナは、一瞬だがヴァイスの鋭い視線を感じた。
恐らくこの前の自分への忠告の事だろう。

「とは言え、昔からヘリが好きでな。そんで今はパイロットだ」

実は、ヴァイスはあまり自分の事を話したくはなかった。ダメな自分を思い出しそうで……。

「ほれ、相方が待つてんだろ？行つてやんな」

早めに話を切りたくて、そう言い格納庫に向かおうとする。

「ありがとうございます」

すると、ティアナが一声掛けて、六課の正門へ向かって行った。
ヴァイスは振り返り、ティアナが行った後を見て優しい笑みを浮かべた。

『ま、元気そうで何よりだ』

108部隊演習場。そこに、一人の男が立っていた。エドワード・クラウンだ。

無音の空気の中、モード2のブレイブアサルトを握り締めている。
静かに目を閉じ、まるで何かを待っている様に見えた。

ガサッ！

「！！！」

物音と同時に目を開き、音のした方へ素早く銃を向け、引き金を引いた。

ガサガサッ！

次から次へとエドワードの周囲で何かが動いた。
すかさず銃を構え、音の順に撃つ。――計4発。

「……………」

4ヶ所から煙が上がっているのを確認すると、銃を降ろした。

ガサッ、キュイイイイン！

一息吐いた所で、後ろから勢い良く最後の一体が突進して来た。

だが、エドワードは予想していたかの様にその何か――ガジェット・ドローン？型を避ける。

「はぁあっ！！！」

そして片手銃で逆にガジェットを殴り付ける。
止めに蹴りを加え、ガジェットは動かなくなった。

蹴りの拍子にしゃがんでいたエドワードが立ち上がると、木の影から拍手の音が聞こえた。

「全部で5体、軽く撃破。すごいじゃない」

彼の恋人、ギンガが笑顔で讃える。だが、エドワードは顔色一つ変えない。

「この程度のレベルと数なら、お前はともかくスバルでも倒せる」

今のガジェットは、実物を真似て作られた訓練用だったのだ。
何処か不満そうなエドワードに、ギンガは不適な笑みを浮かべる。

「でも、「墜ち落とす」じゃなかったの？」

ギンガが言っているのは、最後の倒し方の様だ。
その事を突いた途端、彼の表情は困った様子に変化した。

「茶化すな。俺も近接攻撃ぐらいする」

デバイスを待機形態——腕輪に戻し、ギンガに近寄る。

すると、ギンガはエドワードの腕に抱き付いた。2人だけになると、ギンガはエドワードに甘えなくなるのだ。

しかし、人に見られるのは恥ずかしい様で……。

ピロリロッ、ピロリロッ

「ん、通信か」

都合良く誰かから通信が入った。

エドワードが通信に出ると、ギンガはすぐにエドワードから離れてしまった。

その顔には若干不満が残る。

「エド、それからギンガ。今から仕事を頼みたいんだけど、いいかな？」

通信を掛けて来たのは、2人の上司、ラッド・カルタスだった。

「構いません。で、用件は？」

「ミッド都内のトンネルで事故があったみたいで、その現場検証の援護に向かってくれ」

「了解しました」

通信を切ると、ギンガはエドワードにチョップを繰り返した。

突然の出来事に、エドワードは目を丸くする。

「な、何だ急に？」

「知らない」

当のギンガはそっぽを向いて行ってしまった。

疑問符を浮かべながら、ギンガの後を追うエドワードだった。

デスクワーク中のソラトは、手を休めて何か考え事をしていた。片付いている書類の量を見ると、仕事の事ではないらしい。

「……スバル、今頃アイスでも食べてるのかな」

またしてもスバルの事だった。

しかし、モニターに映っているのはある一つのロストログア——レリック。

「そういえば、このレリックって一体何だろう?」

この前、自分を襲って来たガジェットも、本来このレリックを狙っているはず。

そして所属する103部隊も機動六課に協力をする以上、知っておかねばいけない。

ソラトはほとんど終わった仕事をほっぽり、レリックについて調べ出した。

次々と出てくるレリックの情報に目を通す。特徴、危険性、使用用途、そして今までレリックが原因で起きた事故。

「……これは……」

ソラトはその内の一つに目を見開いた。

ラッドの指示で向かった現場では、1台のトラックが転がっており、

複数の捜査官達が検証している所だった。

「陸士108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。現場検証のお手伝いに参りました」

「同じく、エドワード・クラウン陸曹長です」

「ありがとうございます」

「横転事故と聞きましたが」

「ええ。ただ、事故の状況がどうも奇妙でして……」

一目見ただけでは普通の事故現場だが、確かにどこか雰囲気が違う。

「運転手もどうやら混乱しているんですが、どうも何かに攻撃を受けて荷物が爆発したと言うんですね」

「運んでいた荷物は、缶詰や人形ボトル。爆発する様な物じゃないですね」

散乱した荷物を見回し、不審物がないか探すギンガ。が、やはりこれと言って変わった物は見当たらない。

「それと、下の方に妙な遺留品があつてですね」

「遺留品……？」

捜査官に案内された場所。そこには、この場に不似合いな物が存在していた。

一つはガジェットの残骸。そしてもう一つが……。

「これは……生体ポット!？」

「レリックの反応もまだかすかにある。このガジェットはそれを狙ったんだろうが、一体誰が……?」

何者かがガジェットを破壊し、レリックと生体ポッドの中身を持って行ったか、或いはポッドの中身自体がガジェットを破壊し、レリックを持って行ったのか。

何れにしろ、中身とレリック両方探さなければならない。

「奴らは何の為に……？」

忌々しい記憶が2人の頭に蘇る。

「レリック。第一級搜索指定ロストログア。その性質は高エネルギーを帯びる超高エネルギー体で……」

「外部から大きな魔力を受けると爆発する恐れがある。その結果過去3度周辺を巻き込む大規模な災害を起こしている。その内の一つが……」

「4年前の、ミッド臨海空港の大火災」

「これがスバルとギン姉を……。でも、こんな物を一体……いや、どっちにしたって僕等はこれを捕獲しなきゃいけないんだ。もうあんな事を引き起こさせない為に」

ソラトは調べたレリックのデータを保存すると、残りの仕事に取り掛かった。

丁度その頃、六課のフォワード陣に保護されたボロボロの少女。腕に繋がれた鎖の先には大きなケースが一つ。事件の齒車が今、静かに動き出していた。

次回予告

ソラト「市街地に現れた、ガジェットの大群。狙いはレリック……だけじゃない!？」

エドワード「乱戦の中起こった地震と床が崩壊する音。しまった! 地下にはギンガ達が!」

ソラト&エドワード「次回魔法少女リリカルなのはStrikerS
others side 第5話 Standing by」

エドワード「何だ……? 地面を潜ってる?」

第5話 S t a n d i n g b y

ソラト「最初は、ごく普通の日常だった」

エドワード「ある一つの事故から動き出した歯車は、もう誰にも止められない」

ソラト「中心にあるのは因縁深きロストロギア。悪用なんて絶対させるもんか！」

ソラト&エドワード「魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s
o t h e r s s i d e 始まります」

魔法少女リリカルなのはS t r i k e r s o t h e r s s i d e

第5話 S t a n d i n g b y

薄暗い研究室。白衣を着た男、スカリエッティが秘書のウーノから何かの報告を受けていた。

「レリック反応を追跡していたドローン？型6機、全て破壊されています」

「ほう……。破壊したのは局の魔導師か、それとも当たりを引いたか」

暗い研究所の、更に暗がりの中。赤い髪の少女が話を聞いていた。「当たり」という言葉を待っていたのだ。

「確定は出来ませんが、どうやら後者の様です」

「素晴らしい。早速追跡を掛けるとしよう」

「ねえドクター。それならあたしも出たいんだけど」

少女が奥の方から出て来てスカリエッティに近付いて来た。暗くて顔が見えないが、スカリエッティは声と喋り方で誰かを判別した。

「ノーヴェ。君か」

「ダメよ、ノーヴェ。貴方の武装はまだ調整中なんだし」

ノーヴェと呼ばれた少女は不機嫌そうな雰囲気醸し出している。

「今回出て来たのが当たりなら、自分の目で見てみたい」

イラついた、だが真つすぐな声にスカリエッティは微笑みながら宿める。

「別に焦らずとも、あれはいずれ必ずここにやって来る事になる訳だがね。まあ、落ち着いて待っていて欲しいな。いいかい？」

「……分かった」

終始イラついたまま、無理矢理納得させられたノーヴェは渋々と戻って行った。

「ドローンの出撃は状況を見てからにしましょう。妹達の中から適任者を選んで出します」

「ああ。……後は、愛すべき友人にも引き受けて貰おうか」

ウーノとの通信を終え、別の少女に回線を繋げる。

その少女、ルーテシアとスカリエッティが話している間、ウーノはボードをいじりガジェットに指令を出させていた。

「……まずは、痕跡を始末させる」

事故現場では、エドワードがレリックの反応を調べている間にギンガは機動六課に報告をしていた。

レリック絡みだと分かった以上、タダで済むとは考えにくい。

「エド、六課も動くって」

「そうか。ここは俺に任せて、ギンガは六課の応援を」

「分かったわ」

ギンガが去った後、エドワードは数瞬考え捜査官達を集めた。

「恐らくここも危険になる。避難の準備をしておけ」
「はい！」

敵の探している物が相当な物だとすれば、証拠隠滅も狙って来る。そう踏んだエドワードは、次にこちらにも応援を呼ぶ事にした。

「ふー、やっと終わった」

仕事を終え、車庫へ迎うソラト。今から街へ行けばスバルに会えるかもしれないと思っているのだった。しかし、一本の通信がそれを拒んだ。

「ん？エド兄からだ。しかも仕事用？」

通信を開くと、自らが慕う兄が真剣な顔をしていた。それを感じ取り、ソラトもまた真剣な表情を浮かべる。

「ソラト、今空いてるか？」

「うん、大丈夫だよ」

「急な頼みで悪いんだが、すぐに俺の所へ来てくれ。事情は後で話す」

「分かった。位置を教えて」

エドワードから送られて来た座標を登録。通信を切ると、車庫に到着していた。

ソラトは自分の白いバイクを出しエドワードの元へと向かった。

ギンガは地下水路を走っていた。

既にB Jを身に纏い、六課から提案された合流地点を目指して。

『スバル、どれくらい成長してるかしら？ティアナの実力も見てみたいわ』

妹、そしてその友人との再会に胸が躍る様だ。

だが、今になって改めて考えると、少し不安が残る。

『そういえば、エドの方にもガジェットが来てるとしたら……』

そこに、そんな事を考えさせないかの様にガジェットが待ち構えていた。

「…………スバルも久々に合いたいでしょうし、すぐに終わらせて戻る！」

ギューイイイイン！

リボルバーナックルのギアを唸らせ、ガジェットに特効して行くギンガ。

「邪魔よ！」

恐るべき破壊力を持った拳や蹴りで、次々にガジェットを粉碎していった。

「でりゃああああ！！！」

バゴオオオン！

最後の一体も豪快に殴り倒した。

「ふう、合流地点は……あの壁の向こうね！」

あらかた倒し終えたギンガは壁を破壊し、進んで行く。
後に残るのはガジェットの残骸のみだった。

エドワードの予想通り、あちらこちらにガジェットが集まり始めた。
威嚇するかの様に伸びる触手に、戦闘手段を持たない捜査官達は怯える一方。

が、そんな中不似合いなエンジン音が一つ。
ガジェットの大群の中を突っ切って1台のバイクが現れた。

「ごめん、エド兄。少し遅れた？」

運転手はヘルメットを外し、胸ポケットから青緑色のクリスタルを取り出した。

「いや、良過ぎる位のタイミングだ」

近寄って来る少年にエドワードは苦笑しながら答える。対する少年、ソラトもまた笑い返す。

そして、背中合わせに立った後、

「それじゃ」

「……やるか」

合図と共にソラトはクリスタルを持った右腕を回しながら左前に動かす。

エドワードは両腕を交差させ手前に突き出し、胸の前へ回転させながら持つて行く。

「「セットアップ!」」

高らかに叫んだと同時にソラトは右手を180°回転させる。

「[Standing by]」

すると、ソラトは持っていたクリスタルから、エドワードは右腕の腕輪からそれぞれ帯状魔法陣が出て来て包まれる。

やがて、魔法陣が消えると中から各々のＢＪを装着し、デバイスを手にした２人が現れた。

「鎮魂歌は歌い終わった？」

「お前等を……撃ち墜とす」

決め台詞の後、２人はそれぞれガジェットを迎え撃った。

ソラトとエドワードが戦っている姿を近くから眺めている者がいた。

「おー、やってるやってる」

声のする方には誰もいない。その代わり、地面から手が生えているという何とも奇妙な光景があった。

幸い、２人からは死角となる位置ではあったが。

「セイン、調子はどう？」

誰もいない場所に、ウーノが通信を掛けて来た。

「アイツ、結構強いよ？しかももう1人増えたし」

手の下、つまり地面の中に彼女はいた。

ナンバー6、セイン。

姉であるウーノに言われてガジェットを連れて来た後、地面に潜れるIS「デープダイバー」で隠れて指先に付いている「ペリ・スコープアイ」で戦いを見ていたのだ。

「そろそろヤバいから？型送るよ？」

「ええ。？型を出したらルーテシアお嬢様の方へ行って頂戴」

「はいよー」

軽い返事と共に地面から3体の大きな丸い機械が出て来た。
機械が2人の方へ行つたのを確認すると、そろそろ手も別の方向へ動き出した。

「はあああああ！」

ズバツ！

ガジェットを一刀両断し、息を吐くソラト。

「ふう。エド兄、こっちは終わったよ」

「こっちもだ」

穴の開いたガジェットを踏み、エドワードがライフルを降ろす。

「っ！新しいのが来たよ！」

だが、新手―ガジェット？型が現れ、再び構え直す。

「新型か……？一気につぶ」

ズガガガガッ！

ズゴオオオオオオン！！

「わっ！？何！？」

その時、大きな地震と何処かの床が抜ける様な音がした。

「……しまった、地下にはギンガが！ソラト、ここを任せる！」
「えっ！？エド兄！」

突然そんな事を言われ戸惑うソラトを置いて、エドワードは走り出そうとした。

だが、エドワードの目に信じられない光景が飛び込み、足が止まる。

「なっ……！？手……いや、人が地面に潜っている……？」

先程の手、セインだった。しかもセインは気付いていない。

「あー、ビックリした。今の地震何だったんだろう？」

更に喋った。

怪しい。かなり怪しい。

しかし、手に気を取られている隙に？型の触手がエドワードを襲った。

「エド兄、後ろ！」

「！！？」

ズガァァン！

ソラトの声で我に返り、間一髪攻撃を避ける。

その間にセインはさっさと行ってしまった。

「……すまない。先にこつちを片付けるか」
「うん！」

自分の腑甲斐なさと、邪魔なガジェットへの怒りを表わにするエドワード。

ブレイブアサルトをモード2に変え、早急に終わらせる事を決めた。

保護された少女を乗せたヘリ。

それを見つめる女性が2人。

1人が持つ長距離狙撃砲は非情にもヘリを狙っていた。

次回予告

エドワード「早めにガジェットを潰し、ギンガの元へ向かう。だが、妙に騒がしい……」

ソラト「空中で行われる激しい砲撃合戦！あのピンク色の光は……！」

ソラト&エドワード「次回 魔法少女リリカルなのはStrike
ers others side 第6話 まだ届かない場所」

スカ「君等が気になっている者なんだがね」

第6話 まだ届かない場所

ソラト「現れたのは、異端の存在」

エドワード「知らない所で大切な人が危険な目に逢っているかもしれない。なのに俺は……」

ソラト「そして、戦いは一つの区切りを見せる」

ソラト&エドワード「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

謎の少女を保護し、六課へ向かい飛行する1機のヘリ。

そのパイロットであるヴァイス・グランセニックはある考え事、と言うより心配をしていた。

「何なんだよ今日は。アイツ等大丈夫かよ……？」

その時、巨大な砲撃がヘリに向けて放たれた。高速で近付いて来る砲撃に反応するも、遅かった。

「くっ、避けきれねえ！」

ドガァァン！！

爆音が鳴り響く。

彼が咄嗟に思い浮べたのは、眼帯をした自身の妹。そしてオレンジ頭のツインテール少女。

が、煙の中へりはまだ飛んでいる。

「スターズ2とロングアーチへ。こちらスターズ1。ギリギリセーフでへりの防御成功！」

聞こえて来た声に、安堵と感謝をするヴァイス。それから、集中して六課へと向かった。

まるで、さっき思ってしまった事を気にしない様に。

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第6話 まだ届かない場所

(戦闘BGM:The people with no name
/ RIDER CHIPS Featuring m.c.A.T)

市街地で次々に起こる金属同士がぶつかり合う音。

その音の元となっていたのは、数機の球型の機械と1人の少年だった。

「はああ！」

ソラトはガジェット？型のアームやレーザーを防ぐのみ。その後ろでは巨大な魔法陣を足元に浮かべ、片手銃を両手で構えるエドワードがいた。

「エド兄、出来た？」

「ああ。もういいぞ」

エドワードの合図を聞き、ソラトがガジェットから離れる。

標的が移動したので、追おうとするガジェット。だが、その真正面にいるエドワードに気付く事が出来なかった。

「テラフレイムブレイカー!!」
〔T e r a f l a m e b r e a k e r〕

ガジェットが動く前にトリガーを引き、圧縮された魔力を放つ。

砲撃魔法、テラフレイムブレイカー。

ライフル形態で撃つよりは威力はやや落ちるが、目の前の巨大な金属の塊を打ち抜くには十分過ぎる程だった。

中央に穴を開け、爆散するガジェット。しかし、後ろにいた残り2体には当たらなかった様だ。

砲撃を撃ち終えたエドワードに、すぐさま別の1体が攻撃を仕掛けようとした。

が、それを見過ごす程彼の弟分は甘くはなかった。

〔H o l y r a i d〕
「失礼します」

ガジェットとエドワードの間に躍り出たソラト。次の攻撃の準備も出来ていた。

〔G r a n d c r o s s〕
「グランドオオオオ!!」

縦に振り下ろされた大剣セラフィムを、ガジェットは辛うじてベルト状のアームで防いだ。

しかし、ソラトはそのアームを砕き、振り切る。
これで終わった、と言わんばかりに残りのケーブル状のアームをソラトへ伸ばそうとする。

「クロスウウウ!!」

ソラトは左斜め上に少し振り上げ、横に一閃薙ぐ。その動作に隙は無く、十字の軌跡と共にガジェットは横に真っ二つに裂け爆音を上げた。

「エド兄、あと1体!」

「任せろ」

逆方向からエドワードに向かって来る最後の1体。対するエドワードは静かに銃口を向け、薬莢を1発炸裂させる。

[Net bullet]

トリガーを引き、出て来た光弾は
当たると網の様に広がりガジェットの全身を縛った。

「悪いが、早急に終わらせる」

[Charge]

身動きが取れない相手を前に、エドワードはゆっくりとブレイブアサルトを再び両手で構え、魔力を集中させる。

[Blaster smash]

放った光弾は今度はガジェット目の前で円錐状に展開した。
すかさずエドワードが駆け寄り、円錐に向かって飛び蹴りを放つ。
すると円錐と一体となってドリルの様にガジェットに突撃し、吸い
込まれるかの様に貫いた。

円錐が消え、エドワードが着地すると同時に、ガジェットは爆炎の
中に消えて行った。

「やったね、エド兄」

「ソラト、急ぐぞ」

勝利の余韻に浸る事も無く、何処かへ行こうとするエドワード。

「え、何処へ？」

「ギンガの所だ」

「ちょっと待って！っていうか、大体何でこんな所にガジェットが
いたの！？」

実は、ソラトは詳しい状況説明をまったく受けていなかった。

ただ緊急事態だとエドワードに呼び出され、行ってみればガジェッ
トがいたという事なのだ。

「説明は後だ。行くぞ」

エドワードはそのまま何処かへ走り去ってしまった。
慌てて後を追うソラトだが、

ドゴオオオオオン！！

その頭上で突然大爆発が起こった。

「今度は何！？」

見上げると、巨大な黒い爆風が広がっており、尻尾の様に髪を縛った女性と、その人を抱えて飛ぶ眼鏡を掛けた女性が必死に逃げた。

だが、爆風から逃げ切ったと思ったら、何時の間にか2人の人物に囲まれていた。

どうやら、砲撃魔法で挟み撃ちにして昏倒させるつもりらしい。

「トライデント……スマッシャー！！」

1人は雷を纏った綺麗な金髪の美女。

話に聞いた、「金色の死神」フェイト・T・ハラOWN執務官だ。

「エクセリオン……！」

そしてもう1人。彼女をソラトは知っていた。

「あ、あの人は……」

栗色のツインテール、真っ白なバリアジャケット、桃色の魔力光。

彼女は彼の「超えるべき」目標だった。

ずっとあの人を超えてみせる。そう思っていた。

「管理局の白い悪魔」高町なのは一等空尉。

「バスター!!」

勢い良く放たれた桃色の砲撃は大きく、下で見ていた彼を圧倒した。女性達のいた所で3本の雷の砲撃とぶつかり、轟音を唸らせる。

「これが、高町なのは……」

その豪快な、しかし暖かい力にソラトは歯を食い縛る。見上げる事しか出来ない悔しさに握り拳が震える。

「僕は……まだ……!」

そこは何処までも遠く、まだ届かない場所。

「くっ、これは……」

エドワードは先程まで戦闘があり、ポツカリと穴の開いた場所へと辿り着いた。

この穴の瓦礫が地下を潰しているのが一目瞭然である。

「ギンガー！」

試しに恋人の名前を呼んでみる。が、声が虚しく反射するだけ。エドワードはもう一度叫んで見る事した。

「ギンガー！！返事をしろー！！」

「エドー！」

今度は反応があった。やっと聞いたギンガの声にエドワードはホッとする。

が、聞こえたのは上からであり、しかも元気そうである。

エドワードが上を向くと、ハイウェイにギンガはいた。

「あー！エド兄ー！久しぶりー！」

スバルも現れ、その後ろから次々と見慣れない顔が出て来た。

「……………」

気まずさと、恥ずかしさで顔を赤くするエドワードであった。

降りてきたスバル達に、改めて挨拶をするエドワード。

「陸士108部隊エドワード・クラウン陸曹長です」

さっきの事がなかったかの様に冷静なエドワードに、ギンガとスバルは終始ニヤニヤしっぱなしである。

「そんなに私の事心配だったの？」

「珍しかったよ、エド兄の必死そうな所」

「う、煩い！」

相当恥ずかしかったのか、そっぱを向いてしまう。

その後、フォワード陣とヴィータとも自己紹介を済ませる。リインは知り合いなのでいいのだが。

「彼女を心配して必死に叫ぶエド！格好良かったです！」

「それじゃ、俺とギンガはこれで。報告は後程。またな、スバル」

バツの悪そうに一礼し、去ってしまった。慌ててそれを追うギンガ。誰も周りにいないのを確認し、止まる様子のないエドワードに近寄る。

「ねえ、嬉しかったわよ。心配してくれて」

「……当然だ。恋人だからな」

不器用ながらも自分の事を思ってくれる彼氏に、ギンガは頬を染める。

「……………ありがとう」

ソラトの所に着くまで、ギンガはエドワードの腕に抱き付いていたとの事。

暗い、何処かの研究室。スカリエッティからの通信を開く白衣の男がいた。

「てつきり、君も参加するかと思ったんだが」

「今は聖王よりも、ガジェットの改造に忙しいのだよ。彼が出たんなら話は別だけど」

「君等が気になっている者なんだがね……………いたみたいだよ」
「本当に？」

ガタッ！

スカリエッティの言葉に大きく反応したのは白衣の男じゃなく、その奥にいた少年の方だった。

「何だと！？貴様今回はいないと！」

「どうやら見当が外れたみたいだねえ。ウヒヤヒヤ」

怒る少年を宿める白衣の男。

舌打ちすると、少年は奥の方へと消えてしまった。

「彼、ソラト・レイグラントと言ったかな？」

「そーだよ」

「ソラト・レイグラントはどうやら援軍として呼ばれたらしい。気付かなくて当然だよ」

「フォローどうも。戦闘データは取ってあるの？」

「残念だが取ってない」

「あらら。ま、今回は彼の有無に関わらず参加するよ」

「そうか。期待しているよ。マルバス・マラネロ」

眼鏡の奥に狂気を秘める科学者。

研究所で起こる悲鳴は誰にも聞こえない。

次回予告

エドワード「地下道に不審な反応。向かうのは俺とギンガのみ」

ギンガ「おかしい。敵の数が少なすぎる……？」

エドワード&ギンガ「次回 魔法少女リリカルなのはStrikers others side 第7話 もう1人の科学者」

ギンガ「誰かが見ている気配がする……一体誰なの？」

第7話 もう1人の科学者

ソラト「それは、急に訪れた現実でした」

ソラト「改めて、力の差を実感した。あの人との壁を思い知った。けど僕は……！」

ソラト「そして、事件の裏のもう1つの狂気も動き出す」

ソラト「魔法少女リリカルなのはStrikers others side
side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第7話 もう1人の科学者

何処かも分からない研究室。鳴り響くのは機械の動く音とボートを叩く音のみ。

時折、人の狂った様な笑い声が聞こえて来るが、ここにいる生き物

でそれを気にする者は少ない。

そして、笑い声の元となる科学者は、ボードを打ち込みつつ何処かに通信を繋いだ。

名をマルバス・マラネロという。

「何か用かな？我が同士マラネロ」

通信の相手は世界的犯罪者、ジェイル・スカリエッティ。マラネロはスカリエッティの後に引き起こす「祭」の協力者だったのだ。

「新型のガジェットのデータを送って欲しいんだけど」

「構わないが、あれはまだ試作機でこれからテストをするのだが」

「そのテスト、僕も参加するよ。その新型にもいろいろ参考になる所があるかもしれないからね。それに……」

話の途中で、マラネロの後ろから1つの人影が現れた。

「彼も外に出たいって言ってるし」

モニター上のスカリエッティはやれやれといった感じで新型「ガジェット」型改のデータを送信した。

「さーて、量産しますか」

マラネロが再びボードを打ち出す。すると、目の前の機械が？型を

データの通りに改造し始めた。

その傍で、影の中にいる少年が満足そうに口を歪ませた。

エドワードとギンガは現在警邏任務の真っ最中だった。

今日は午後から機動六課との合同任務、つまりスバル達と会えるのだ。

その事もあり、ギンガは今朝から上機嫌だった。

因みに、2人以外の人員は気を使って2人よりずっと後ろにいる。

「嬉しそつだな、ギンガ」

「あら、エドはスバルと会つゝの嬉しくない？」

「いや、そういう訳ではないが……」

エドワードが気にしているのは弟分の方だ。

103部隊はどうやら別の部隊に出向研修の為、ソラトはまたスバルに会えない。この前も会えなかった分、激しく落ち込んでいたのだ。

「まあ、ソラトには悪いと思うけど……」

苦笑いを浮かべるギンガ。

写真でも撮つて送つておこうと思う兄と姉だった。

警邏も異常は無く、報告を上司であるラッド・カルタスにする事にした。

「こちらファーストアベニュー警邏隊。異常無しです」

「ご苦勞様。あ、そうだ。機動六課のフォワードメンバーはこっちに向かっているそうだよ。妹達に会えなくて残念だったね、ギンガ」

「いえ」

カルタスの知らせに、少し困った様な表情をするギンガ。早く会いたかったが、訓練の時に会えるだろう。

「まあ、うちの捜査員や魔導師達との合同訓練の方は」

ピピピッ

「ん、アラート？」

カルタスの話を遮ったアラート。それはエドワード達の方にも来ていた。どうやら別の隊からだ。

「こちらサードアベニュー警邏隊。近隣の武装捜査員、応答願います」

数分程前、ある地下道にて2人の少女が数体の機械を連れていた。

「おっ、ドクターマラネロからだ。今日は……げっ、アイツと一緒にかあ」

メールを嫌そうに読んでいるのは水色のセミロングの少女、セイン。

「え〜。あたしアイツ嫌いッス〜」

もう一方の、濃いピンク系の髪を後ろで縛った少女、ウェンディはもうはつきりと嫌いと言っている。

「ま、アイツとは通路が違うから顔を合わせる事はないけど」
「それなら良かったッス」

余程嫌われている様だ。

だが、そんな事を気にしていもられない事態になっていった。

「そういえばルートが3つあったけど、あと1つは誰が……ん？」

外の方から、人の話し声らしき音が聞こえる。地下道は静かなだけに、外からの音も反響して聞こえるのだ。

「……応答願います。E37地下道に不審な反応を発見しました。
識別コード未確認！アシノウン確認処理を……」

「見つかったやつた？」
「ありま〜」

しかし、見つかったからといって慌てる訳でもなかった。
それは余裕から来るのか、気の軽さから来るのかは不明だが。

地下道の別の場所にて。自分達が見つかったという情報に、むしろ嬉々としている少年がいた。

「漸く人を殺せるぜ。ククク……」

持っている剣を舐め、興奮状態にある少年。

が、そこに1つのウィンドウが。映っているのは彼の生みの親、マラネロだった。

「今日は1人も殺しちゃ駄目だよ」

「っはああ！？何でだよ！？久々の外だぜ！？」

殺してはいけない。彼にとっては檻に入れられるのと同等で、途端に不機嫌そうに声を荒げた。

「今ここで大きな騒ぎを起こせば後で大変な事になる。いい？」

「チッ！分かったよ！」

少年は剣をしまうと、不貞腐れて横になってしまった。

六課のフォワード達が現場に着くおよそ30分程前。

一足先にエドワード達が辿り着いていた。

地下道を進んで行くと、途中道が右、左、真つすぐと別れており、その別れ目に先程アラートを出したらしき警邏隊がいた。

「どうしました？」

「いえ、ここからそれぞれの道全てに反応があるんです」

確かに、装置は3つの通路の奥全てに反応している。

「分かった。俺とギンガは左、他は右を行け。それと、何人かはここに残れ。後で増援が来るから一緒に正面へ進め」
「はい！」

エドワードは指示を出し、ギンガを連れて左の道を進む。すると、すぐにガジェットと遭遇した。

「いけるか？ギンガ」

「もう1人連れて来れば良かった？」

「……フツ。聞いてみただけだ」

軽いやりとりの後、即座にデバイスを起動させて2人はガジェットに向かって行った。

別のルートでは、108部隊の隊員達が順調にガジェットを潰して行った。

やがて全てのガジェットを倒し、安堵する。

だが、隊員達は気付かない。

1つは、ガジエツトの数が普段より少なく、しかも「?型しか」いなかったこと。

「獲物が来たかあ」

もう1つは、上にも敵がいた事。

「ほら、行けよ」

誰かの声がした。それと共に巨大な物体が上から落ちて来る。もし彼等が敵を倒すのがもっと遅ければ、新たな情報として「それら」―ガジエツト?型改の対策が練られたであろう。

最も、頭上から急に現れたのでは意味は無いが。

「ぐわあああ!」

苦痛の叫びを上げ、次々と倒れて行く。

しかし、最後の1人が放った光弾が運良く1体のカメラに当たり倒す事が出来た。

ピタッと他の機体の動きが止まり、更に上から1人の人間が降りて来た。

黒いボサボサした髪と、蛍光グリーンの眼がその男が危険だと示している。

「やるじゃん」

一言。それだけ言い放つとその隊員を殴り飛ばした。

殴られた隊員は、そのまま他の隊員と同じく動かなくなってしまう。

「チツ、欲求不満だあ」

腰に刺してあるS字状の剣「エリミネーター」を抜き、少年デュトロ・コンマースが気だるそうに言う。

「お前等でいいや。斬らせろおお!!」

殺してはいけない。だがこの命の無いポンコツなら別だ。

狂気に満ちた笑みを浮かべ、その場にいた？型改を斬り裂く。
全て破壊した後、デュトロは呟く。

「やっぱ、人を殺す方が面白えや。帰るぜ」

剣を鞘に収め、デュトロは消えた。

目を覚ました隊員が見た物は、誰がやったかも分からないガジェット
トの残骸のみだと言う。

エドワードとギンガもガジェットの大群を叩きのめして、先に進んでいた。

暫くして、広い場所に出た。ところが、そこにガジェットは1体もない。

これまでも、別れ道があったが、道しるべみたくガジェットが1体だけいたり、何故か以前と比べて敵の数が少なかったりと、変な部分があった。

まるで、2人を誘い込むかの様に。

「畏、か」

構え、周囲を見渡すエドワードとギンガ。

ゾクッ……！

「「！！？」」

一瞬、鋭い視線を感じた。振り返っても、誰もいない。だが、見られている感覚は消えない。

「何だこの殺気は……？」

「一体誰なの！？」

射殺す様な冷たい気配に反して、敵は姿を見せるどころか何もしない。それが却って緊張を増加させる。

「……………」

パチンッ

指を鳴らす音と共に、ガジェット？型改がさつきと同じ様に上から現れる。視線に気を取られていたため反応が遅れてしまっていた。

その瞬間、ギンガは目にした。

通路の影に碧色の髪がなびいているのを。

そこから、まるで生き物全てを恨むかの如く冷たく光る赤い眼を。

恐ろしく、けれど何処か悲しい殺気を放つ少年らしき人影を。

姿をよく見ようとすると？型改が立ち塞がり、その間に少年は消えてしまった。

「ギンガ！」

「……」

恋人の呼び声で、目を覚ますギンガ。今は目の前の敵に専念しなければならぬ。

「ごめん、エドー！」

気の迷いを振り切り、ギンガはガジェットに拳をぶつけた。

全てが片付き、外に出た頃には夜になっていた。

気絶していた隊員達も全員無事で、敵の新しい動きも無いので警戒態勢は解く事に。

「ギン姉！エド兄！」

「スバル！」

ギンガ達は、合流したフォワード達とそのまま夕食を共にする事になった。

思わぬ形ではあるが、スバルと再会して喜ぶギンガであった。

再び、マラネロの研究所。今日取ったデータの整理をしているらしい。

「どうだい？あの新型は」

「使えないね」

キツパリと言い切るマラネロ。そこで、ふと思い出した様にスカリエッティに尋ね返す。

「そう言えば、彼女はもうしてる？僕と君の合作」

「……ああ、ノーヴェか」

「呼んだ？」

丁度良いタイミングで、スカリエッティの後方から赤毛の少女、ノ

ーヴエが出て来た。

「ドクターマラネロ、久しぶり」

「はい、久しぶりだねえ」

「君が提供してくれた遺伝子で作り出されたナンバーズ9番。出来は最高だよ」

「それは何より」

満足そうに笑うマラネロ。しかし、ノーヴエは目付きの悪いまま。彼女はマラネロが嫌いだった。スカリエッティより素性の知れないこの男が。

「彼女のデータも見てみたいものだ」

「ふっ、お楽しみは……公開意見陳述会に」

モニターを隔てて、科学者2人の笑い声が木霊する。

着実に進む悪夢の計画。今はまだ、誰も知らぬまま。

次回予告

エドワード「ギンガが六課に出向する事になった。…暫く会えなくなるな」

ギンガ「だからって用意された1日デート。もう、父さんったら！」

エドワード&ギンガ「次回 魔法少女リリカルなのはStrike
rS o t h e r s s i d e 第8話 出向前日」

「ムー...」と、うしろを向いて、

第8話 出向前日

暗い通路を歩く足音が一つ。

顔こそは見えないが、背丈から少年だという事が分かる。

そこに、逆方向からも別の人間が歩いて来た。

彼が嫌っている者の一人、デュトロ・コンマースだ。

「よお。お出掛けかい？」

「……………」

少年は何も言わずに立ち去ろうとする。

「おいおい、つれねえじゃねえか」

調子一つ変えず、少年はデュトロを無視した。
しかし、デュトロの横を通り過ぎようとした時、放たれた言葉に反応してしまう。

「ソラト・レイグラントだっけか？あのカキ」

「……」

「アイツも俺が殺して」

「奴を殺すのは俺だ！手を出すな！」

漸く来た返事に、面白そうな笑みを浮かべるデュトロ。

「甘え事言ってんな、てめーは。ナンバーズの連中もそうだ。まともなのはクアットロぐらいか？」

「手を出してみる。お前をぶっ殺す」

碧色の髪が揺れる。

怒りに震えたオーラを出し、少年は威嚇した。

「戦場に出れば誰だろうと同じ獲物だ。我慢出来たら譲ってやるよ、ヒャーハハハハ！」

少年の牽制を、デュトロはまるで気にせずにその場を後にする。

奴はただの獣。血に飢え、肉を欲し、殺戮を望むのみ。

デュトロのそんな狂気じみた所が、少年は嫌いだった。

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第8話 出向前日

場所を移して陸士108部隊隊舎。

エドワードはゲンヤに呼び出されていた。

急いで来いと言われたので、何か事件でもあったのかと警戒して行ったのだが、隊長室にいたギンガや、本局技術官のマリエル・アテナの様子から見て、大した事はなさそうだった。

「どうした？エド。そんな慌てて」

「それはこっちの台詞です。急げと言われて来たんですが？」

「ああ、そうだったな。実はな、ギンガとそこにいるマリエル技術官が暫く六課に出向する事になってな」

「！」

つまり、暫くはギンガに会えなくなるという事だった。少し、寂しくなるなと思うエドワード。

「そうですか」

「そこでだ。おめえとギンガに明日1日休みをやる。デートでもして来い」

「「……ええ！？」」

あまりに唐突な休みを貰い、エドワード、それとギンガも驚く。

「話はそれだけだ。仕事に戻っていいぞ」

「と、父さん！急に言われても……」

「いいじゃねえか。暫く会えねえんだし」

「まあまあ、楽しんで来なさいな2人共」

「……………」

ゲンヤのあっけらかんとした態度に加え、マリエルまで乗ってしま

い、最早エドワードは何も言えなくなる。

こうして、デートをする事を勝手に決められた2人であった。

翌日。彼等は何かに乗っており、ゆっくりと坂を登っていた。

「ほら、エド！見て見て！」

はしゃぐギンガの横で、エドワードは無表情のままだ。だが、それは普段より何処か「怯え」を感じさせる。

そうしている内にもギンガが指を差す先、坂の頂上へとどんどん近付いている。

登り切れば、後は降りるだけのはず。だが、この先何が起こるか2人は知っている。

ただ降りるわけではない。落ちると言い換えても良い程の速さで降りるのだ。

止める事は出来ない。彼等が乗っている物は、勝手に進んでいるからだ。

そして、彼等は声を上げながら落ちて行った。

「きゃあああっ」

「——っ！！」

それは、「ジェットコースター」と呼ばれる物。

彼等は今、遊園地に来ていた。

ジェットコースターから降りたエドワードはぐったりとしていた。そんな彼氏の様子に、ギンガは仕方なくベンチで休憩する事に。

「けど、エドが絶叫系苦手だったなんてびっくりね」

「いや、連続10本以上も乗れば誰でもこうなる……と思うぞ……」

そう、実は遊園地に来てからギンガに連れられ絶叫系ばかり乗り回されていたのだ。その数、13本。

最初はエドワードも普通に楽しんでいたのだが、だんだんと酔っていき現在に至る。

が、当のギンガは全然平気そうにしていた。

「……楽しいか？」

「ええ、とっても」

普段職場では決して見せない楽しそうな笑顔に、エドワードも幾らかは満足していた。

「2人で遊園地に来たのなんて初めてだもん」

そう言えばそうだ、と思い返す。

付き合う前や付き合い始めの頃は仕事で忙しく、デートといっても街中のみだった。

『ここは、ゲンヤさんに感謝すべきか……』

「さ、次行きましょ！」

「……出来れば少しゆっくりした奴に……」

「ダーメ♪」

楽しい時間というのは瞬く間に過ぎて行くもので。外はすっかり夜になっていた。

事前にマリエルから指示を受けていたエドワードはギンガを連れてちよつと洒落たレストランに来ていた。

「「乾杯」」

グラスがチンと小気味良い音を立て、ムードを一層引き立てる。

因みに、グラスの中はただの炭酸飲料である。

「大丈夫なの？ここ高くない？」

「心配いらない」

普段ギンガに奢った時の夕食代よりやや安いぐらいだというのは内緒だ。

「……………」

ギンガは今日一日のエドワードに僅かな違和感を持っていた。落ちて着きが無いというべきか。

遊園地でも、ここでも。いや、昨日から彼の表情に影を感じる。

それが何なのか、彼女は大体感付いていた。

「やっぱり心配？」

「何がだ？代金の事なら」

「違うの。私が六課に行く事」

「……………」

エドワードの右眉がピクリと動いた。凶星だ。

「心配……してはいないさ」

彼の口からは否定の言葉。

心配してくれるのは素直に嬉しかった。が、2人きりの時ぐらい強がって欲しくなかった。

「向こうにはスバルがいる。八神二佐やリイン曹長、お前の尊敬するハラオウン執務官もいる。…あいつの目標だっているしな」

「なら！」

「だがもし何かあったら、すぐ俺を呼んでくれ。それが言いたかったんだ」

エドワードの目は真剣で、やはり何処か寂しそうだ。

ギンガは思い出した。この人はこういう性格だったことを。

『やっぱり、心配してるじゃない』

微笑みながら頷くギンガ。それだけで、エドワードから影が消えた気がした。

唇同士が優しく触れ合う。それは2人の約束の印。

地上本部。本部長の部屋には、その部屋の主ともう1人別の男がいた。

「高い金を払って雇うんだ。しっかり仕事をしてくれよ」

「分かっている。陳述会での護衛だろう？」

男の服装から正規の局員でない事が分かる。

「俺と、この「イリス」さえあれば十分だ」

男の名はアトレー・ハイゼット。賞金稼ぎ擬いの囑託魔導師だ。

アトレーは右手に握っている白い籠手の様な物を突き出し、自身有りという感じで言う。

飛び交うは様々な思惑と意志。

時空管理局地上本部

公開意見陳述会まで、あと8日。

次回予告

シャーリー「六課に出向したマリーさん。私達ともすっかり意気投合！」

ギンガ「フォワードの皆にエドとの事を聞かれて困る私。そうだ！スバルの話は！」

ソラト「陳述会でスバルに会える！浮かれそうになる僕に模擬戦の申し込みが」

シャーリー&ギンガ「次回魔法少女リリカルなのはStS ot hers side 第9話 好敵手」

ソラト「仕方ない、相手になるよ」

第9話 好敵手

エドワード「それは、僅かな心配と切なる願い」

ギンガ「絶対平気と言い切れないけど、何時でも貴方を頼ってるから」

エドワード「今なら俺は君を守れる。そう信じて約束を交わす」

エドワード&ギンガ「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第9話 好敵手

時間は昼休み。

朝訓練していたフォワード達も、今は昼食を終えてロングアーチ陣

のシャリオとアルトと談笑をしている。

そこに、最近になって新しい人間が入って来た。

1人はフォワード陣のスバルの姉、ギンガ。

もう1人は本局の技術官マリエル。

2人はこの前から六課に出向していた。

「でもマツハキャリバーとブリッツキャリバーはシャリーが組んだんでしょう？難しくなかった？」

「正直難しかったですけど、やりがいがあって楽しかったです。それで、ここの所マリーさんの意見が欲しいんですよ」

特にシャリオとマリエルはデバイスマイスター同士すぐに打ち解け合い、今じゃプチ師弟を名乗る程である。

「ところで、ギンガさんは恋人とかいるんですか？」

急にアルトが振って来た話題に、エリオとキャロ以外全員が食いついた。

当のギンガは困惑してる。

「えっ？うん、いるけど……」

「エドワードっていう人。ほら、ティアナ達は会った事あるよね」

ギンガの代わりにスバルが答える。

以前エドワードと会った事のあるフォワード陣はピンと来ていたが、シャリオとアルトはまだよく分からないといった顔だ。

「2人の馴れ初め、私も気になる」

マリエルまで乗り気になってしまい、恥ずかしさのあまり顔を赤めるギンガ。

しかし、ここである打開策を考え付く事になる。

「えーっと……あ！スバルの話の方が面白いと思いますよ！」

「えっ？私とソラト？」

スバルの話を出す事で見事に標的を変えることに成功したのだった。急な振りに驚いてソラトの名前を出してしまった時に、皆の目が輝いた様に見えた。

「何々？ソラトって誰？」

「スバルにも恋人がいたの？」

「どんな人？格好良い？」

「教えなさいよ！」

すっかりスバルの彼氏の話に興味津々のアルト、シャリオ、マリエル、ティアナ。

エリキヤロも好奇心からか、身を乗り出している。

先程のギンガと違いスバルには逃げ道もない。

「わ、分かった。話すよ」

取り敢えず皆を落ち着けた後、少し頬を染めてスバルは話し出した。ソラトとの思い出話を。

「はっ！はあっ！」

103部隊演習場に響く掛け声。ソラトが素振りしている声だ。

「せいっ！はあっ！」

今日のソラトはいつもより気合いが入っていた。その理由は今から約1時間前まで遡る。

103部隊の全員に伝えられた公開意見陳述会の護衛任務。

その際に機動六課とも一緒になる。

そう、つまりスバルに会えるかもしれないのだ。

最近すれ違いが多く、なかなか再会出来なかっただけに、ソラトは一気に有頂天に達した。

「スバル、元気にしてるかな？ギン姉も向こうにいるし。楽しみだなあ」

「随分楽しそうじゃないか。ソラト・レイグラント」

不意にソラトの背後から声がした。

振り返ると、そこにいたのは雪の様に白い髪と、それに良く合う紺色の目を持つ、ソラトと同年代の少年。

「また君か、シビック」

シビック・ラグレイト。それが少年の名前だ。シビックがソラトの前に現れてする事はいつも決まっている。相手のソラトが「また」と言って呆れる程。

「さあ、僕と勝負してくれるかな？」

同じ隊にいるソラトとシビックは、言わば好敵手である。ただし、シビックが一方的にそう見ているだけだが。シビックは同じ隊でソラトにのみ勝った事が無い。それがプライドの高い彼に劣等感を抱かせていた。

「君を倒せば、僕は提督になれるのかな？」

「分からないよ。でも仕方ない、相手になるよ」

シビックはソラトが嫌いだが、ソラトは彼を嫌ってはいなかった。別段好敵手意識も持っていなかったし、仲間だと思っている。だが、異様なまでに自分に執着して来るのには困っていた。

でも無視する訳にもいかないので、たまに相手をしてあげているのだ。

苦笑いをしつつ、ソラトはポケットから待機中のセラフィムを取り出した。

「ソラトは私の幼なじみなの。私が7歳ぐらいの時に会って、それからよく一緒に遊んだんだ」

スバルは小さい頃、ソラトとギンガの3人で遊んだ時の話を語った。

春、蝶達と花畑を駆け回った事。

夏、海で泳いだりスイカ割りをした事。

秋、紅葉を集めてサツマイモを焼いた事。

冬、雪合戦の後かまくらで温まった事。

やがて時は経ち、訓練校時代の話になる。

「私とソラトが訓練校に入ったのは同じ時なんだけど、ソラトは1年で卒業するコースを選んだ」

これは聞いた話だが、ソラトは強くなる為にそこに猛特訓を積んだらしい。

「卒業した後、ソラトは陸士103部隊に配属。あ、その時にエド兄―ギン姉の彼氏に会ったって言ってた」

全員の視線が一斉にギンガの方に向く。

ギンガが再び顔を赤くして、いいから進めて！と言うので先に進める事に。

「その時から……ううん、もっと前からかな？私がソラトの事を好きって思う様になったのは。でも……」

ここでスバルは口籠もる。が、再度話を始める。

この時ギンガ、ティアナ、マリエルが表情を強張らせた事は全員知らない。

「私、自分に自信が無かったから告白出来なかった。相手に拒絶されたらうと思うと怖くて……。で、エド兄に相談したの。そしたら」

『ソラトは避けたりしない。お前やギンガの事を家族の様に思っている。それはスバルも知ってるはずだ。だから、好きになったんだろっ？』

「って。それで自信がついて、告白したんだ」

止まる事なく鳴り響く金属同士がぶつかり合う音。
地を蹴る音と合わさり、何処かで誰かが戦っている事が見ずとも分かる。

「くううう！」

ソラトは押されていた。物理的に。

身の丈ぐらいある大剣セラフィムで必死に受け止めているのはシビツクのデバイス。

「はああっ！！」

シビツクがソラトを弾き飛ばす。

幸い、後ろにある木にぶつかる前に体勢を直せたが。

「防御しかしないつもりかな？それじゃあ僕には勝てないよ」

シビツクの両腕には、肘辺りまでを覆う白い大きな手甲があった。その先には指の様な5本の鋭い爪。

アームドデバイス「フロズヴィトニル」である。

「そろそろ終わりかな」

足元にベルカ式の魔法陣を出現させ、右側の爪に冷気を宿らせる。

「Crystal claw」

デバイスから電子音が放たれると同時にシビツクはフロズヴィトニルを掌を上々に構え、ソラトの腹部に突撃させた。

「しまっ……!!」

避ける間もなく、ソラトは強大な一撃を受ける事になってしまった。

「私はソラトを呼んだの。ソラトと出会った公園に。ソラトはあの時と同じ様に砂場に座ってた」

スバルはその時の光景を思い出しながら口にする。

立ち上がり、先に口を開いたのはソラトだった。

「懐かしいな。ここで君と出会ったんだ」

釣られて、スバルも話し出す。

「うん、あの時、貴方は泣いてたね」

「あははは。そんな小さかった僕を救ったのは君だよ、スバル」

月明かりを背に、スバルを見つめるソラトの雰囲気はいつもと違う。普段見せる、何処か幼さを残した純粋な少年でなく1人の凛々しい男性の顔。

そんなソラトの姿に自然とスバルは顔が熱くなるのを感じた。

「そ、そんな凄い事したかな……」

「したよ。スバルがいなかったら僕は……。だから今でも感謝してる」

「私も、ソラトにはいつも助けてもらってる。だから、言わないといけない事があるの」

スバルは一瞬躊躇いの表情を浮かべたが、ソラトの優しい笑顔を見て再び決心を固めた。

「私は……私とギン姉は、戦闘機人なの！」

スバルがしようとしていた告白の1つに当然ソラトは驚いていたが、すぐに元の笑顔に戻った。

「関係ないよ、そんなの」

「……！」

「スバルはスバルだし、ギン姉はギン姉。2人とも、僕の大切な幼なじみ」

期待しながらも諦めていた答えに、スバルは泣きそうになる。でもまだ泣いてはいけない。もう1つの告白があるから。今は「まだ」大切な幼なじみだから。

「……あのね、ソラトをここに呼んだ理由、もう1つあって……」

一度深呼吸をし、心を落ち着ける。

「私、ソラトが好き！大好き！」

大声で告白したスバル。ソラトは、どうやらこっちの告白の方が驚いた様だった。

「「……………」」

ソラトにとっては短く、スバルにとっては長く感じられた沈黙。そして、ソラトは話し出した。

「あの時、僕は誓った事があるんだ」

ゆつくりとスバルに近付き、右手をそつと差し出す。

「君を一生守る。僕は君だけの騎士となる」

差し出された手を、スバルは震えた手で握る。すると、その手を引いて、ソラトはスバルを抱き締めた。

「スバル、君が好きだ。この世界の誰よりも」

スバルは驚きのあまり目を見開き、固まった。
だが、何が起こったかを理解し、ソラトを抱き返す。

「もう、泣いていいよね？」

「うん。いいよ」

大好きな彼の肩で、スバルは堪えていた涙を流した。それは嬉しさから来るもの。

夜のそよ風は少し冷たいが、好きな人の腕の中は温かかった。

やがてスバルも落ち着き、顔を上げる。2人は見つめ合い、キスをした。

長い長い2人だけの時間。月だけが、その様子を見守っていた。

「……と、まあこんな話何だけど……あれ？」

恥ずかしそうに話に幕を下ろすスバル。因みに、戦闘機人関連の話はしっかり省いている。

しかし、気付いた時には皆目に涙を溜めていた。

「良かったわね……スバル」

「え、ええ〜？」

皆泣きだしてしまいスバルは困惑していた。こんなつもりじゃなかったのだが。

『でも、ソラト……早く会いたいなあ』

愛する人を想い再会出来る日、公開意見陳述会を楽しみに待つスバルだった。

「まだまだだよ」

一撃を加えた後、シビックはソラトをそのまま倒し、地面に押し付けて引き摺り出した。

「これで僕の勝ちかなあ？」

「いや、僕の勝ちだよ」

なんと、ソラトはいきなり引き摺る爪から脱出したのだ。

「なっ！？そんなバカな！」

何が起こったか分からず当惑するシビック。

実は、ソラトは最初の一撃をセラフィムで受け止めていたのだ。後は引き摺られている間にセラフィムで無理矢理どけたという事である。

「グランドクロス！」

逃げる隙も与えず、ソラトは巨大な十字を切る。

まともに受けてしまったシビックは地へと崩れ落ちた。

「何で……何で君に勝てない！」

「君に守る人はいるかい？」

悔しがるシビックの問いにソラトは問い返す。

「守る人だと？」

「守る人の無い攻撃なんて僕には届かないよ」

セラフィムを待機形態に戻し、立ち去るソラト。

シビックにはソラトの言う事が理解出来なかった。

少年はより高い場所を目指す。あの日の誓いを果たす為に。

時空管理局地上本部

公開意見陳述会まで、あと3日。

次回予告

ソラト「ついに訪れた陳述会の日。でも、スバルは何処だろう……？」

エドワード「ラウムと再会するが、良からぬ噂を耳にする。囑託魔導師が何故……？」

ソラト「そして始まる悪夢の日。こんなに敵が来るなんて！」

ソラト&エドワード「次回魔法少女リリカルなのはStrike
rS o t h e r s s i d e 第10話 その日の彼等は……」

ソラト「戦いの幕が、開かれる」

第10話 その日の彼等は……

ソラト「それは、2人結ばれた日に改めてした誓い」

スバル「大好きな貴方との日々を思い出しながら、貴方と会える日
を待つ」

ソラト「でも、待っていた現実には、予想以上に残酷だった」

ソラト&スバル「魔法少女リリカルなのはStrikers o
thers side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第10話 その日の彼等は……

公開意見陳述会当日。

警備隊は日の出前から地上本部前で待機する事になっている。

ソラトの所属する陸士103部隊、エドワードの所属する108部隊も例外ではない。

移動するヘリの中、ソラトは青緑色のクリスタル、セラフイムを見つめて物思いに耽っていた。

「どうしましたか？」

愛機の問いに静かに俯くソラト。

「何か嫌な事が起こる気がするんだ。特に戦闘機人が気掛かりだ」

「レディスバル達と何か関係が？」

「分からない。でも、まったく無関係という訳じゃ無さそうだ」

スバルとギンガの正体、そして2人の母親、クイント・ナカジマを殺したのも戦闘機人。レリックとはまた別の因縁のある相手となる。

「敵が来た時は頼むよ、セラフイム」

「勿論です、マスター」

地上本部にあるヘリポートに、1人の少女が向かっていた。

手には水筒と紙コップを持っている。先程警備部隊から貰った物だ。その少女、ティアナ・ランスターはある人物と話がしたかった。六課のヘリパイロット、ヴァイス・グランセニツクである。

これまで何度か自分を気に掛けてくれたのだが、その際にした話が素人にしては詳し過ぎる。

なので、気になり調べてみたら驚くべき事実があったのだ。

その真意を確かめるべくティアナは行動に出た。

「別にそんなつもりはないから！ただちょっと気になっただけなんだからね！」

と、自分に言い聞かせてはいたが。

ヴァイスのいるへりをノックすると、彼が気付き外に出て来た。

「おう、どうした？」

「警備部隊の方からお茶の差し入れを頂きましたんで、お届けに」

「お、いいねえ。ありがとよ」

「どうぞ」

コップにお茶を注ぎ、渡すティアナ。

それを受け取ると、ヴァイスはへりに寄り掛かり一口飲んだ。

「連中は？」

「警備も端っこの方なので交替でのんびりやってます。ご一緒に
も？」

「おう」

ヴァイスの返答を聞き、ティアナは隣に寄り掛かる。

すっかり気を良くしたヴァイスに対しそろそろティアナは本題を切り出す事にした。

「実は……失礼かとは思ったんですが、ヴァイス陸曹の事ちょっと
調べちゃいました」

「？」

「数年前までエース級の魔導師だったって」

突然のティアナの話にヴァイスは一瞬顔をしかめるが、すぐに何でもない様な表情に戻る。

「何じゃそりゃ？エースなもんかい。俺の魔力値なんざお前の半分以下だったの」

話をさらつと流そうとするが、ティアナがそれを許さなかった。

「それでもアウトレンジショットの達人で優秀な狙撃手だったって」
「はあゝ。昔はどうあれ、今の俺は六課のヘリパイロットだ。おめえが聞いて参考になる話なんざねえぞ」

「……………」

溜め息混じりでヴァイスが説得をするも、ティアナはまだ納得していない様子でじつとこちらを見ていた。

自分の事を探られるのがいい加減頭に来て、ヴァイスは口調を強める。

「…………！大体おめえは余計な事考えてる場合か？ポケットとしてつと、またミスショットで泣くぞ！バカタレが！」

言い終わると、ヴァイスはお茶を飲み干し紙コップを握り潰す。その態度に少しムツと来たものの無表情のまま、ティアナは謝った。

「…………すみませんでした。気を付けます」

「分かれば良し。行け」

「はい」

潰した紙コップを投げ渡し、ティアナを追い払うヴァイス。後輩を見送る表情は、少し悔やんだ様であった。

「はあ……昔の話さ。そうだろ？ ストームレイダー」
「そうですね」

ぼつりと愛機に呟いた言葉は、1人と1機以外誰にも聞こえない。

地上本部に着いたソラトはエドワードと合流し、警備をしながらスバルを探していた。

「スバル、何処かな？」

「そう急ぐな……と言っても無理か」

日も昇り晴れ渡る空の下、彼女を探してはしゃぐ姿は正に子供の様で、エドワードも自然と笑みを浮かべる。

余談だが、近くにいた女性局員達はソラトを見て可愛い、と話していたそうだ。

「何をそんなにはしゃいでいるのかな？」

横から聞き慣れた声が聞こえた。自称ソラトの好敵手、シビックだ。

「まあ僕には関係ないけど、何か起きた時に僕等の足を引っ張ら」

「ごめんシビック、また後で。エド兄、あっち行ってみよう！」

シビックの言葉を遮り、ソラトは別の方へ行ってしまった。

「すまないな」

不憫に思ったのか、代わりにエドワードが謝罪しその場を後にする。

「……やっぱり、僕はアイツ嫌いだ!!」

残されたシビックは怒りのあまり拳を握り締めた。

「いないなあ……」

もうそろそろ日が暮れそうな頃。スバルはまったく見つからなかった。

それもその筈、最初ソラトとエドワードはスバル達と真逆の位置にいたのだ。

そしてスバルは2人と同じ方向へ移動している。

鉢合わせる訳が無かった。

「中にいるのかな……？」

そうとは知らず、だんだん落ち込みつつあるソラト。

「まだ時間はある。その内会えるだろう」

「……うん」

エドワードの慰めにソラトは笑顔を向けた。

「ん、あれは……」

ふと、エドワードが見つけた人間。珍しく声を掛けると、その人物

はこちらを振り向いた。

「ラウム」

「……エドか」

エドワードの旧友、ラウム・ヴァンガードがこちらに近づいて来た。すると、ラウムはエドワードの隣に見知らぬ少年がいる事に気付いた。

彼の視線を察し、エドワードが紹介する。

「コイツがソラトだ。ソラト・レイグランツ」

「ああ、お前の弟分か」

「ソラト、こいつはラウム。俺の古い友だ」

ソラトにもラウムを紹介する。

ラウムに対するソラトの第一印象は、エド兄に似た人だった。

「ラウム・ヴァンガードだ。よろしく」

「ど、どうも。ソラト・レイグランツです」

深々と礼をするソラトにラウムはきょとんとしたが、すぐに微笑む。

「いい弟を持ったな」

「ああ」

「ところで、だ。知ってるか？ 奴の事」
「奴？」

少しの世間話の後、真剣な表情（といっても普段と変わらないが）になり、話出すラウム。

「例の囑託魔導師が今回いるらしい」

「そうか。だが何故アトレー・ハイゼットが？」

アトレー・ハイゼット。少しばかり地上部隊では有名で、その時の依頼に応じて報酬を要求する賞金稼ぎ擬いの囑託魔導師だ。だが金の為なら味方も手に掛けると言われている。

実力も去る事ながら、彼の使うデバイスもまた特殊だった。

Individual Rebel Intercept - System

通称、イリス

非人格の籠手型アームドデバイスで、使用魔法やイリスに仕込まれた他のデバイスの管理は、全てイリスのコンピューターが統制している。その力は未知数。

しかし、現段階ではまだ未完成なので、限界使用時間は30分と定められている様だ。

「上もある程度は危険を感じている様だ。とは言え、少々奴に依存している所もあるようだかな」

「気にする事はない。俺達は自分の仕事をするだけだ」

エドワードは気にする素振りをまったく見せない。ラウムも同感だと頷いた。

「そう言えば、もう恋人には」

「待て！今それは……」

エドワードがラウムの口を塞ぐ前に、ソラトは壁に手を着いて落ち

込んでてしまっていた。

それは地上本部に来た時と正反対な程暗くなって。

「何で、何で会えないんだろう……。スバル、ああスバル……」

「……すまない、禁句だったか」

「……過ぎた事だ、気にするな」

その時、地上本部内部から幾つかの爆音が鳴り響いた。

「「「!」」」

続けて、紫色の光の中から現れるガジェットの大群。

それは、悲劇の幕開け。

科学者の狂った笑い声が聞こえてきそうだった。

次回予告

ソラト「始まった敵の攻撃。まさかこんなにも突然なんて!」

エドワード「何だ、この胸騒ぎは?……っギンガ!？」

ソラト「時折聞こえる残忍な笑い声と肉を斬る音。対峙するのは……」

…？
」

ソラト「次回魔法少女リリカルなのはStrikers
o t h e
r s s i d e 第11話 急襲
」

シビツク「君を倒せば、提督になれるのかな？
」

第11話 急襲

エドワード「ついに始まった公開意見陳述会。談笑しながらの警備」
ソラト「けど予測も出来なかった敵の襲撃。それは、あまりにも突然過ぎて」

エドワード「頭に浮かぶのは、愛しい人への心配」

ソラト&エドワード「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第11話 急襲

突如現れた大量のガジェット。

その後ろからは狂気に満ちた眼で既に臨戦態勢に入っている者がいた。

「ククク……皆殺しだぜ……」

デュトロはその場にいるナンバーズ全員に通信を入れた。

「おいナンバーズ！お前等邪魔すんじゃねえぞ！」

それだけ言つと一方的に通信を切る。これで遠慮なく敵を殺れる。

「さあ、行くぜー!!」

エリミネーターを構え、目の前のガジェットを斬り飛ばし走る。

今、残忍な獣が解き放たれた。

「おゝ、やってるやってる」

地上本部の様子をモニターで見ながら呑気な声を上げる男。マラネ口である。

モニターに移っているのは無慈悲な攻撃を仕掛けるガジェット、何とか食い止めようと奮闘する管理局員、暴れ回るデュトロ、そして…。

「君のお目当てだよ」

一つのモニターの映像を後ろにいる少年に渡す。少年はその映像をじっと見ていた。

「ソラト……」

そんな少年を尻目にマラネロはパイプオルガンの前に座る。これはこの男の趣味なのだ。
モニターに移る戦いを見ながら、マラネロはパイプオルガンを弾き始めた。

（戦闘BGM：神崎士郎）

ソラト、エドワード、ラウムの3人は必死にガジェットの攻撃を押さえていた。足元には既に倒れている局員がいる。

「エド兄！そっち行つた！」

「了解した」

ソラトの横を移動したガジェットをエドワードが撃つ。だがもう一体ソラトを背後から狙っている機体があった。

ドガアッ！

しかしガジェットの触手がソラトに届く事はなかった。その後ろからラウムが三叉槍型デバイス「ガーゴイル」で貫いているからだ。

長年のコンビであるソラトとエドワード、昔のパートナーであったエドワードとラウムはともかくソラトとラウムは今日初めて会ったばかりだ。

にも関わらず、この3人は絶妙なチームワークを発揮していた。

「すみませんラウムさん、助かりました」

「気にするな。次、来るぞ！」

「はい！」

休む暇もなく立ち向かう3人。強力なトリオが誕生した瞬間だった。

3人がいる場所とはまた別の場所。本部の中から一人の男が歩いて来る。アトレー・ハイゼットだ。

「ありがたく思え。イリスの力を見られる事を！」

右手に持った籠手を左掌に押し当てる。

ピピッ

[Ready]

機械音が鳴ると籠手を前へ突き出す。

「セットアップ！」

[Rise up]

起動ワードを唱えると、籠手から群青色の帯状魔法陣が現れアトレ
ーの体を覆う。

数秒経ち、中から白い鎧を着たアトレーが歩いて来た。

ベルトにはバックル部に先程の籠手、イリス本体が、右腰には十字
を形取った剣「イリスカリバー」が付いている。

「フォルムツヴァイ」

〔Gun mode〕

アトレーがイリスカリバーを取り、命令するとイリスが反応。イリ
スカリバーの形が変化した

イリスはAIを持たないコンピューターで制御されている為全て音
声コードを認識して行動するのだ。

刀身がなくなり、T字の銃形態となったイリスカリバーをガジェット
トに向け引き金を引く。すると僅か

数発でガジェットは破壊されてしまった。

「そこか」

ある程度片付けると、ビルの上を見据える。そこにいたのはナンバ
ーズ10番、ディエチ。

アトレーは走り出した。ビルを登る為に。

イリスには飛行機能は付いていなかったのだ。

地下では2人の戦闘機人の戦いが繰り広げられていた。

1人はギンガ、もう1人はナンバーズ5番、チンク。

チンクの攻撃手段は投げナイフと、それを爆破させるIS「ランブ

ルデトネイター」。

近距離主流のギンガにはやり難い相手だった。
それでも2人は互角の戦いをしている。

「私には分からぬ。何故そこまで人間らしく生きる事が出来る？お前も機人だろうに！」

「貴方も人間らしく生きれば良いじゃない！罪を認めて投降すればチャンスはあるわ！」

この状態で更に自分を説得しようとする、チンクはますますギンガという女が分からなくなった。

「悪いが、妹達の為にも負けられんのだ！」

「あら奇遇ね。私もよ！」

激突する間に言葉を交わす。まるで仲の良い者同士の様に。

「お互い、可愛い妹を持つと苦労するわね」

「まっただ」

戦いの最中だというのに、ギンガとチンクは苦笑し合う。

その時、ギンガにピンクの光弾が飛んで来た。完全な不意打ちと、少し気が緩んでいた為モロに当たる。

「でりゃああああ！！！」

続いて聞こえて来たのは自分の妹の声。だがその声の主は違った。ギンガの眼に映ったのはスバルに良く似ているが髪と眼の色が違う。ナンバーズ9番、ノーヴェが自分に拳を叩きつける姿だった。

「チンク姉、大丈夫？」

ギンガを吹き飛ばし、チンクの元へ駆け寄るノーヴェ。後からライディングボードに乗ってウェンディもやって来た。

「ああ、お前達のお陰だ」

助けに来た妹2人の頭を撫でるチンク。ノーヴェは普段人前では見せない嬉しそうな笑みを浮かべた。

「で、ゼロファーストはどうするッスか？」

「まず邪魔なナックルを腕ごと外す。手伝え」

「うん」

「了解ッス！」

近付いて来る3つの人影もろくに見えない。

『ごめん、スバル……負けちゃった……』

薄れ行く意識の中、ギンガは愛しい人との約束を思い出した。

『もし何かあったら、すぐ俺を呼んでくれ』

『エド！エド……エ……ド……』

心の中で恋人の名前を強く呼び、ギンガは意識を手放した。

「……すまない」

「何か言った？チンク姉」

「いや、何も」

「っ！！」

外で戦っていたエドワードがハッと眼を見開く。ギンガの声が聞こえた気がしたのだ。

「……ギンガ！？」

ガジェットを蹴り飛ばし、エドワードは一目散に走り出す。

「エド兄！？」

「エド、何処へ！？」

「すまない2人共！後を任せる！」

突然いなくなつたエドワードに驚くソラトとラウム。
けど、普段冷静なエドワードが何時に無く慌てている様子から何かあつたんだなとこの場を無言で引き受けた。

「ヒヤハハハハア！」

戦場に響くのは肉を裂き、骨を断ち、血が吹き出す音。そして局員の苦痛の叫びと笑い声。
もう何人殺したかも分からない。そういえば途中でポンコツがあつたなあ。壊しちまつただけ。

「殺して、破壊して、混乱を招く！こんな楽しいこと他にねえ！ヒヤハハハハ！」

エリミネーターに付着した血を舐め、高らかに笑うデュトロ。
周囲にいる警備隊は恐れて逃げようとする。
しかしこの獣はそれすらも許さない。

「待てよ。まだ足りねえんだよ。死んでけえええ！」

新たな獲物に駆け寄ろうとする。その時、横から氷の爪が飛んで来た。
た。

すぐにそれを避け、飛んで来た方向を睨む。

第12話 奪われたもの

エドワード「微笑んでいられた時間が一変、爆音轟く惨劇の舞台と化した」

エドワード「戦いの最中、ふと聞こえた恋人の声。不安を胸に無我夢中で駆け出す」

エドワード「そして、悪い予感現実となる」

エドワード「魔法少女リリカルなのはStrikers others side
r s s i d e 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第12話 奪われたもの

ギンガと連絡が繋がらなくなった。その事でスバルは焦っている。

「スバル！先行しすぎ！」

ティアナは必死にスバルを呼び止めようとしていた。

飛行魔法を持たないティアナは今、なのはに抱えられて飛んでいる。しかし、狭い地下通路ならばスバルのローラーの方が飛行魔法より速い。

結局、先走るスバルを止めることが出来なかった。

今ロングアーチも危ない。六課隊舎が襲撃されているのだ。

ティアナはもう一人心配していた。何時の間にか彼女の心に居着いていた人を。

『ヴァイスさん……』

とあるビルの上、ディエチは地上の人間を狙い撃とうとしていた。それ故に気付かない。自分に近づいて来る者の事に。

バン！

扉が勢い良く開かれた。

「見つけたぞ」

突然現れた男に銃を構えられている。
油断した。デイエチは悔やんだ。

「生憎俺はバインドが出来ない。ので、死体で持ち帰るぞ」

物騒な事を言う白い鎧の男、アトレーが引き金を引く前にデイエチは隣のビルへ飛び移った。

飛行こそは出来ないが、ビルからビルへ飛ぶ事は出来る。
だが、それはアトレーも同じだった。

「待て！」

「えええええ！？」

重そうな鎧を着ているにも関わらずその身軽さに驚くデイエチ。
こうして、ビルの上での鬼ごっこが開始された。

地上本部地下。エドワードは走っていた。確信は無いが、妙な胸騒ぎがする。

すると、前方から猛スピードで接近する2つの影に気付いた。

「止まれ！」

銃を向け、威嚇するエドワード。相手は1人は浮遊するボードに乗った少女。もう1人は…。

「……スバル？」

「何だデメー！」

自分の妹分に似ている。だが、すぐに違う事が分かった。
そして、もう1人の方の後ろの棺の様なコンテナに目を付ける。

「そのコンテナの中身は何だ？」

「どうだっていいだろ！そんなの！」

「そうッス！さっさと退」

「答えろ！！」

何時に無く焦り、ウエンディが乗るボードを撃つ。慌てて避けたが、魔力弾が擦ってしまいコンテナから何か落ちてしまった。

「っ！！」

それを見てエドワードは目を見開いた。

彼がよく見た、彼女がいつも着けていた物。

左腕のリボルバーナックルだった。

更に、コンテナの中から紫色の長い髪が出ている。

そして、辺りに漂う血の匂い。

それだけで、コンテナの中に何がどのような状態で入っているか理解出来た。

「ギン、ガ……？」

守ると決めた筈だった愛しいもの。

それが今、傷付けられ奪われようとしている。

「チッ！」

ノーヴェガリボルバーナックルを拾い、髪と一緒にコンテナの中に収める。

「……放せ……」

[Shot form]

ブレイブアサルトを片手銃型にし、フラフラと近寄るエドワード。

「ギンガを……放せ……」

怒りと後悔で周りが見えていない。ただ、恐るべき殺気と威圧感を放っている。

「くっ！」のおおおー！

この空気に耐えられなくなり、ノーヴェがエドワードに手を出す。

「ギンガを放せええええ!!」

彼を知る者からは想像も付かない程、エドワードは叫んだ。
迫り来る拳を避け、同時に銃身で殴る。

「ぐあああ!!」

吹っ飛ばされ、ノーヴェは壁に叩きつけられた。
ウェンディも応戦しようとするが、その前にエドワードが近付いた。

ドゴッ!

ウェンディをボードから蹴り落とし、銃でもう一撃加えようとする。
だが、それは黄色の光弾に阻まれた。ノーヴェだ。

「てんめええええ!!」

怒りを爆発させ、ジェットエッジのローラーを回しながら向かって来る。

先程のスバルとの交戦時に受けた傷が目立つが、ノーヴェは無視している。

「邪魔だ」

だがやはり威力が弱まったのか、エドワードはノーヴェの蹴りをブレイブアサルトで受け止めている。
ただし、その所為で少しひびが入っているが。

「失せろおおお!!」

受け止めた脚を左手で持ち、空いたブレイブアサルトをノーヴェの懐に押し込め、連射した。

「うああああ!!」

至近距離で撃たれ、苦しむノーヴェ。だがブレイブアサルトもその反動を受けひびが大きくなる。

「くっ………そ………おおおおお!!」

痛みを堪え、ノーヴェはエネルギー弾を連発する。

しかし、エドワードに当たる箇所は全て撃ち墜とされてしまった。

「これでも食らえッス!」

左方から今までチャージしていたウェンディの砲撃が襲う。
流石に墜とす事も避ける事も出来ず命中してしまった。

「へへーん、やつ……！？」

倒したと思い喜ぶウェンディ。だがその顔は驚きへと変わっていく。

今の砲撃を左腕の防御魔法だけで防いだのだ。

だが、エドワードには左腕の感覚が無い。恐らく折れているのだろう。

そんな事すら、今のエドワードにはどうでも良いことだった。

[B l a s t e r s m a s h]

ウェンディに放った光弾が円錐状に展開した。避ける事も出来ず、
怯えるウェンディ。

「このおおおおー！！」

[N e t b u l l e t]

「なっ！？」

ノーヴェがエネルギー弾を放とうとするも、空かさずバインドで縛られる。

「ギンガ、もうすぐ俺が！！」

ウェンディに止めを刺すべく、エドワードは円錐目がけて飛び蹴りを入れようとした。

この時、気付かなかった。

地面から突如出て来た女性2人に。

1人は水色のセミロングでもう1を抱えている。

そしてもう1人は長い銀髪で何本かナイフを投げている。

ナイフは1本はブレイブアサルトのひび、残り全ては自身に刺さり、投げた少女の指を弾く音と共に爆発した。

エドワードは思い出していた。以前市街地でガジェットと戦った時に見た地面に生えた手の事を。

「あの時の……」

円錐は消え、自分は地へ墜ちた。もう全身の感覚もない。
ブレイブアサルトも本体こそ無事だがとても使える状態ではない。

「ギンガ……ギンガ……俺……が……助け……」

が、まだギンガを助けようとしている。
唯一動く右手をギンガが入っている筈のコンテナに必死に伸ばし、名前を呼ぶ。

「約束……俺が……まも……ギン……ガ……」

周囲からは2人共無事か？チンク姉こそ、大丈夫？などと声がするが、エドワードの耳には届いていない。
もうギンガの事しか頭になかった。

「ギ……ン……」

やがて手は無常にも力尽きるように落ちてしまふ。彼が見据えるコンテナももう行ってしまった。

気を失う最後まで、エドワードはギンガの事を思っていた。

肉の焼ける匂いと血の香り。無残に倒れた狙撃手。
奪われたものは、遥か遠くへ。

次回予告

ラウム「長かった襲撃戦もうすぐ終わりが近付く」

ソラト「君と出会うはずだった。互いに笑顔を浮かべ合いながら。
なのに……」

ラウム「悲しい現実映るのは、あの日の無力な自分自身」

ソラト&ラウム「次回魔法少女リリカルなのはStS o t h e

r s s i d e 第13話 悲痛の叫び「

ソラト「僕は、また……！」

第13話 悲痛の叫び

ソラト「それは、奪われた大切なものでした」

エドワード「約束を果たせなかった戦士は、不様にも地にひれ伏すのみ。俺は……」

ソラト「そしてまた、一つの戦いに幕が降りる時」

ソラト&エドワード「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第13話 悲痛の叫び

シビックは苦戦していた。目の前にいる殺人鬼に。

「どーした？その程度かよ？」

相手の戦闘スタイルは単純。剣を振り回し斬り付けるのみ。
それだけなのに、ここまで苦戦している。シビックには相手が何な
のか理解出来なかった。

「こんな……こんな奴に!!」

「ヒヤッハアアア!!」

デュトロは剣に魔力を貯めて斬撃波として放つ。彼が使える唯一の
魔法、「スローターエッジ」。

この魔法自体も単純だが、強力である。
シビックはフロズヴィトニルで受け止めるが、もうボロボロで長く
持ちそうもない。
とうとうシビックは片膝を付いてしまう。

「なかなか楽しめたぜ。じゃあな」

デュトロは歓喜の笑みを浮かべ、エリミネーターを振りかざす。

「死ねええええ!!」

無慈悲にもそれは振り下ろされた。

「アイッ……しっこい……」

ディエチは地上に下りていた。あれからビルからビルへ飛び逃げていたのだが、向こうは諦める気が無い。

「ここにいたか」

「！！」

現に、今ディエチの後ろにいた。アトレーは剣形態に戻したイリスカリバーを構えている。

「くっ！このっ！」

慌ててイメーノスカノンを構えるディエチ。だがその砲身は呆気なく斬られてしまう。

「終わりだ。その命貰うぞ！」

どちらが悪役だか分からない台詞を吐き、アトレーはディエチを斬り付けようとする。

もうダメだ、とディエチは目を瞑った。

ビーン！ビーン！

「ぐ、ぐああああ！」

しかし、イリスカリバー牙ディエチを傷付ける事はなく、逆にアトレーが悲鳴を上げる事に。

イリスから警告音が鳴り、体中から煙を吹いている。

やがて鎧もイリスカリバーも解除され、イリス本体だけが残った。

「じ、時間切れか……」

そう、イリスには使用制限時間があつたのだ。

それを越えるとリジエクシオンが起こり、強制解除してしまう。

アトレーはリジエクシオンの負担で動けない。だがイメーノスカノンも使い物にならない。

ディエチは一先ずクアットロの所へ逃げる事にした。

アトレーが動ける頃には完全に見失い、仕方なく残りのガジェット
の掃討をする事にしたのだった。

「何だよいい所で！」

今、剣がシビックに振り下ろされる、という時に入って来た通信。
それはデュトロの作り主、マラネロからだった。

「残念だけど、撤収だよ」

「チッ！もうかよ！」

「用事は全て済んだみたいだし、早く引き上げてよ」

「……わぁーったよ！お前、運良かったな」

エリミネーターを鞘にしまい、渋々帰ろうとするデュトロ。

「だが次は確実に殺すからな！その顔覚えてぜ！ヒヤハハハハ！」

高笑いを残し、デュトロは現れた光の中に消えた。

自分は生かされた。敵の気紛れによって。

シビックは悔しさに震えていた。何も出来なかった自分に苛立ちながら。

「アイツ……次は必ず……！」

デュトロへの報復を心に決めながら。

「キリが無いな……」

もう何機目になるか分からないガジェットを葬りながらラウムは呟いた。

「でも、頑張りましょう。エド兄が帰ってくるまで！」

同じ様にガジェットを斬りながらソラトが応じる。

「ふっ、そうだな」

〔Charge〕

足元にベルカ式の魔法陣が現れ、ラウムはガーゴイルを構える。

そこに、3機のガジェットが突っ込んで来た。

「バズズストライク!!」

〔B a z u z u s t r i k e〕

魔法陣の輝きが増し、ラウムはガジェット目がけ一気にガーゴイルを突き刺した。

刃は3機のガジェットを貫き、爆散させる。

ラウムの圧倒的な実力に、ソラトは感嘆の声を上げた。

『僕も負けていけない!』

今だに残るガジェットの大群目指し足を踏み出そうとした。

「スバル・ナカジマ二等陸士!大丈夫ですか!」

その時、ふと聞こえた声。

「え？」

ソラトは一瞬自分の耳を疑った。

まさか、そんなスバルが……。

声のした方を振り向く。見えたのは1台の担架で運ばれる少女とそれに付き添う人。
担架に乗っている人の顔を見て、ソラトは信じられない程のショックを受けた。

「スバル……？」

最愛の人が血塗れで運ばれている。

何で？

僕が守らなきゃいけないのに？

何故気付かなかった？

嘘だ。

これは悪い夢なんだ。

「ソラト、どうした？」

ラウムの呼び掛けにも反応しない。ソラトは愕然と膝を付いた。

「あ……ああ……」

今日は君と会う筈だった。

また君に会える時を楽しみにしてたんだ。

こんな痛々しい姿を見たかった訳じゃない。

こんな筈じゃ……。

「ソラト！」

ソラトの背後に迫るガジェット。ラウムがそれを食い止める。

そうか、お前等の所為か。

「うああ……ああ……」

「ソラト！しっかりしろ！」

お前等の所為でスバルが……！

「ソラト！」

「うああああああ！！！」

鎮魂歌は歌い終わったか？

〔Wing form〕

ベルカ式の魔法陣の中で、ソラトは立ち上がった。

脚には青緑色の魔力が纏い、浮き上がる。

セラフィムの刀身にはホバーが現れ煙を吹く。

「お前等……お前等あああ！！！」

ガジェットの群れにソラトは向かった。

セラフィム第2形態、ウイングフォルム。

脚に付いた浮遊魔法のお陰でマツハキャリバー並の速度で動く事が出来る。

大剣を大きく振りかぶり、1体を真つ二つに斬る。
だがそのモーションは隙が多く、周囲のガジェットはソラトを狙い
撃ちにしようとした。――普通なら。

ズバツ！ズバツ！

何と、もう2、3体を素早く斬り捨てた。

セラフィムのホバーから大量の煙が吹き出る。それが振り切った時
の勢いを殺し、更に次の攻撃の勢いを付ける事になる。
つまり、重い攻撃を素早く出す事が出来るのだ。

5体、6体、7体……次々とガジェットを破壊し、気付けば残りは
撤収を始めていた。

「待て！」

ソラトは逃がそうとせず、更にガジェットを斬ろうとする。

「もうよせ！ソラト！」

怒りで周りが見えないソラトをラウムが押さえる。
敵は完全にいなくなり、ソラトはもう1度膝を地に付く。

「僕は……僕は、また……！」

セラフィムを落とし、涙を流す。また愛する人を守れなかったという自責の念を抱いて。

この日、時空管理局は大敗を喫した。

沢山の悲劇と傷を残して。

次回予告

ソラト「2人再会の場所は、病院。あの時と同じで、何も変わらない」

スバル「貴方は何も悪くない。そう言っても、思いは伝わらず」

ソラト「話は、僕達の出会いの時まで遡る」

ソラト&スバル「次回魔法少女リリカルなのはStS o t h e
r s s i d e 第14話 機械仕掛けの女神」

スバル「私が友達になれば、貴方はもう独りじゃなくなるよ」

第14話 機械仕掛けの女神

ソラト「襲撃を受けた地上本部。その爪痕はとても大きくて」

スバル「傷付き、さらわれた大切な人。悲痛の叫びは深い後悔を乗せて」

ソラト「また何も出来なかったと、無力な自分を許せずにいる」

ソラト&スバル「魔法少女リリカルなのはStrikers others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第14話 機械仕掛けの女神

「な、何だと!?!」

地上本部、本部長の部屋にアトレー・ハイゼットの怒号が鳴り響く。

「言った通り、任務失敗だ。金はやれん」

冷たく言い放つ本部長に、アトレーの怒りは納まらない。

「何故だ！？俺が何機のカジエツトを壊したと！」

「お前がどのくらい敵を倒そうと、こちらはかなりの被害を受けた。局員も多数負傷者を出している」

確かにアトレーはイリスで多くのカジエツトを倒した。

しかし、元々護衛が任務であったが、地上本部は機能停止状態に追いやられた。

アトレーの任務失敗は明らかだった。

「くっ、ならばもう一度チャンスをくれ！今度こそ戦果をあげてみせる！」

「……分かった。ガツカリさせるなよ」

必死なアトレーの訴えに本部長も渋々了承する。

頭を下げるアトレー。その顔は、歪んだ笑みを浮かべていた。

一方、スバルの見舞いをしたティアナはヴァイスの元を訪れていた。

「ヴァイス陸曹……」

名前を呼ぶも、反応はない。

ヴァイスは今、全身を包帯で巻かれ、酸素マスクを着けていた。先日の六課襲撃の際に攻撃をともに受け、意識不明の重体となっていた。

『最後に話した時には怒られたっけ』

昨日の事を振り返る。あの時はこんな事になるなんて思わなかった。峠を越えたとは言え、眠るヴァイスの横顔に胸を痛めるティアナ。

『けど、私がここで悲しんでいる暇はない』

傷付いた人は他にも大勢いる。大切な人を奪われた人だっている。

『私がしっかりしないと、いけないんですよね』

涙を堪え、退出しようとする。

「目が覚めたら、今度はちゃんと貴方の事教えて下さいね」

ティアナはヴァイスに笑みを向け、自分の持ち場へ戻って行った。

翌日、自身の隊の事後処理を漸く終えたソラトは最も会いたかった人の所に来た。

彼の恋人、スバルの元へ。

「スバル……」

現在、病室にはスバル1人だけ。
ノックをし、ドアを開けて中へ入る。

「やあ、スバル……っ！」

「ソラト」

ベッドの上にいたスバルの痛々しい姿に、ソラトはまたショックを受けた。

頭と右腕に巻かれた包帯。

所々に貼られた絆創膏やガーゼ。

悔しさで、拳を握る力が強くなる。

「あの時」を彷彿させるからだ。

ソラトはベッドの隣に腰掛ける。

しかし、お互いに何を話していいのか分からない。
会いたかった筈なのに、こんな形で再会してしまった。

長い沈黙の後、先に喋りだしたのはソラトだった。

「久しぶり、だね」

「うん」

「……あの時と同じだ」

「え？ あっ……」

「あの時」。それは4年前の空港火災の時の事。

「君はベッドの上にいて、僕がお見舞いに来て……。僕はまた、君を守る事が出来なかった」

「そんな！ソラトは」

「あの時と何も変わっていない！ごめん、スバル……」

ソラトはスバルに頭を下げる。声が微かに震えていた。

「何でソラトが謝るの？ソラトは悪くないよ」

そんなソラトを見て、スバルは不安そうになる。

「悪いのは私の方だよ。命令を無視して、勝手に突っ込んで大怪我を負って、ギン姉も助けられなくて、ソラトに心配掛けて……」

今の自分を見ればソラトはきっとショックを受ける。そう分かっていたからスバルはソラトに会いたくなかった。

「だから謝らなきゃいけないのは」

「それでも君を守れなかった！」

スバルの言葉を遮り、怒鳴り声を出すソラト。

いきなりの大声にスバルはビクツと身を震わせた。

「しかも、今回はギン姉もさらわれて、エド兄もボロボロになった。僕だけが、何も出来ていない……」

自責の念と後悔で涙を流す。

「君と初めて会った時、君は僕を救ってくれた」

ソラトの脳裏にフラッシュバックされる光景。

それは2人が出会った時の事。

あの日失ったのは、「絆」。

僕は父さんと母さんと、3人で暮らしていた。

2人共管理局勤めで、父さんは腕の立つ捜査官だった。

内勤の母さんとは同じ部隊で知り合い、友人の手助けもあり結婚。
やがて僕が生まれた。

とても、幸せだった。

それは僕が9歳の頃に起こった。

何が原因かも分からない。外で倒れていて、気付けば家が燃えていた。

突然の火事。両親の死。傷の痛みも感じない程のショック。
両親が必死に逃がした僕だけが生き残った。

何が何だか分からなくなった。果たして、誰が悪いのか。

僕は深い闇に落ちて行った。孤独という名の闇に。

葬式を終えて家もある程度片付くと、誰が僕を引き取るかという話になった。

けど、そんな事はどうでも良かった。

顔も知らない親戚達が話し合う中、僕は1人公園へと抜け出した。

この公園でよく父さんと遊んだ。

砂場に座り込み、思い出に浸る。

そうしながら、僕の中の闇はどんどん大きくなる。

この苦しみから誰も救う事は出来ないだろう。そうとさえ思えた。

「どうしたの？」

そんな時、1人の少女が話し掛けて来た。

恐らくさっきまでここで遊んでいたのだろう。

辺りはすっかり暗くなっていて、他の子供達はいなくなっていた。

「どうして、そんなに悲しそうなの？」

この子に話しても何かが変わる訳でもないだろう。それでも僕に話し掛ける。

話せば、少しは気分が晴れるのかな？

その子の声にそう思えて、俯いていた顔を上げる。

初めて、その少女の顔を見た。
月明かりに照らされた青いショートカットにつぶらな緑色の瞳。
僕はその子に力無く答えた。

「僕は独りなんだ……。父さんと母さんが死んじゃったから……」

その子は目を見開いて驚いていた。

ほら、何にもならない。

僕はそれで終わりだと思っていた。

「そっか……。私と一緒にだね」

その子の答えに、今度は僕が驚かされた。

こんな笑顔でいられる彼女が、僕と同じ……？

「私もね、お母さんが死んじゃったの。でも、ギン姉とお父さんがいるから独りじゃないの」

彼女は母親を亡くしていた。

でも、独りじゃない。

「僕にはもう誰もいない……。僕は独りぼっちなんだ……」

自分の言ってる事に涙を浮かべそうになる。

でも、次の彼女の言葉に僕はまた驚かされる事になる。

「私が友達になれば、貴方はもう独りじゃないよ」

彼女は僕の作る壁をことごとく壊す。

差し出された手のひらと、彼女の笑顔を見た。

嬉しかった。

僕には彼女が救いの女神に見えた。

掴み取った手は小さくも温かく感じた。

彼女の笑顔は眩しい光となり、僕を包んでいた闇を照らした。

引っ張られる形で立ち上がると、もう苦しみはない。

「私はスバル。スバル・ナカジマ」

「……僕はソラト。ソラト・レイグラント」

以来、君は僕の全てとなった。

あの夜の事は一生忘れられない。

僕を孤独から救ってくれた君に感謝し尽くせない。

そして、誓った事。僕は君を守る。君だけの騎士となる。

その決意は今も揺らぐ事は無い。

「あの時決めたんだ。それなのに……全然、ダメだね」

自虐的に笑うソラト。

誰よりも守りたい。その大きすぎる気持ちが自分を押し潰してしま
いそう。

そんな彼にスバルはゆっくりと口を開く。

「大丈夫だよ。私は……大丈夫だから」

スバルはソラトの手を握む。その上にポロポロと落ちるのは涙。

「ギン姉もまだ助けられるし、エド兄ももうすぐ目を覚ますって聞
いた。だから次、頑張って……」

「スバル……」

「今のソラト、見たくないよ……。私は平気だから、ソラトも一緒
に頑張ろう、ね？」

泣きながら、自分の不安を取り除こうと笑顔を作るスバルに、ソラ
トはまた自分を責めたくなる。

『僕が心配掛けて、泣かせちゃったんだね……』

握られている手を握り返し、そのままスバルを抱き締める。

「ソラト……？」

「ごめん、心配掛けて。次は必ず君を守るから」

「うん。頼りにしてる、私の騎士様」

それから2人は日が暮れるまでずっと一緒にいた。
会っていなかった間の時間を埋めるように。

2人には笑顔が戻っており、普段通り仲の良い雰囲気が流れていた。

少年は決意を新たにする。

愛しき彼女と幼き日の誓いに嘘を吐かないために。

次回予告

エドワード「再び動いた敵の狙いは、地上本部が所有する兵器の破壊」

ラウム「漸く目覚めたエドワード。だが少し様子がおかしい……？」

エドワード「頭に浮かぶのは、俺が持つ唯一の記憶」

エドワード&ラウム「次回魔法少女リリカルなのはStrike
rS o t h e r s s i d e 第15話 アインヘリヤル」

ラウム「お前は、その程度の男か？」

第15話 アインヘリヤル

ソラト「それは運命の出会いと不変の誓い」

スバル「いつも大事に思ってくれる貴方を支える為に、「大丈夫」と笑い掛ける」

ソラト「後悔を乗り越えて、決意を新たにもっと心強く」

ソラト&スバル「魔法少女リリカルなのはStrikers others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第15話 アインヘリヤル

俺は闇を走っていた。

何処かも分からない暗闇の中を。

何かを追い掛けていた様な気がする。

それが何かは思い出せないが。

「エ……ト……」

足音しか聞こえない筈の空間に聞こえた声。それは…俺の名前？

「ギンガ……！？」

俺はふと口にした名前で思い出した。俺は大切な人を追いかけていたんだ。

声のした方を向く。そこにいたのは、血に塗れて左腕のない恋人。

「ギンガ……！」

必死に手を伸ばすが、ギンガはどんどん遠ざかって行く。

「ギンガあああ……！」

腕を伸ばし、飛び起きたエドワード。

周りを見回しても、ギンガの姿は無い。

「夢……」

どうやらここは病院の一室の様だった。

ベッドの上において、体に包帯が巻かれている。

一旦冷静になり、状況分析をする。
地上本部の地下で2人の戦闘機人と戦い、止めを刺そうとしたら地面からもう2人現れて……。

『気を失っている所を病院に運ばれたのか……』

「起きたか」

横から聞き慣れた男性の声。
それは彼の友人、ラウムだった。

ラウムは椅子に腰掛け、本を読んでいる。ページを見ると随分前からここにいらしい。

「……ああ。あれからどの位たった？」

「一週間だ」

「一週間……そんなに寝ていたのか」

「左腕骨折に全身火傷。寧ろ回復が早い方だと思うが？」

無茶したな、と苦笑するラウム。

しかし、エドワードは別の事を気にしていた。

「ギンガ……ギンガは！？」

「落ち着け」

「アイツ、さらわれたんだ！助けたのか？何処だ！？」

ラウムはため息を吐き、読んでいた本を閉じる。

「……まだ行方不明だ」

「……」

ラウムの返事を聞き、再び躍起になるエドワード。
ベッドを抜け出そうとするが体の痛みで動けない。

「落ち着けと言った筈だ」

「これが落ち着いていられるか！」

「今のお前に何が出来る？」

突き刺さるラウムの言葉に、エドワードは動きを止める。

「お前の彼女の居場所も不明なんだ。今は情報を待て」

「俺は約束したんだ。すぐ助けに行くと」

ギンガは自分に助けを求めた、とエドワードは確信していた。

「だが、俺は守れなかった……」

「エド？」

珍しく弱音を吐くエドワード。

頭には、ギンガとの思い出が蘇る。

一方、ミッドチルダのとある高野。

そこに「アインヘリヤル」と呼ばれる巨大な質量兵器が存在していた。

が、今スカリエッティに造られた戦闘機人「ナンバーズ」に襲撃されていた。

まだ準備段階だった為、用を足さずに次々と破壊されてしまう。その場にいた守備隊も応戦するが、歯が立たず倒れていく。

その一ヶ所に、ある男がいた。

「俺にもう失敗は許されない。命を貰うぞ！」

アトレー・ハイゼットだ。

その目の先にいる少女、ウエンディはまったく気付いていない。右手に持つイリスを左掌へ合わせる。

[R e a d y]

魔力を認識したイリスが電子音を発すると、イリスを前へ突き出す。

「セットアップ！」

[R i s e u p]

イリスから群青色の帯状魔法陣が出て来て、アトレーを包む。するとすぐに、中から白を基調とした鎧を身につけたアトレーがイリスカリバーを構え、ウエンディに襲い掛かった。

「！！！」

だが、アトレーに気付いたオットーが光弾を放ち防ぐ。

「フォルムツヴァイ！」

〔Gun mode〕

光弾を転がり避けると同時にイリスカリバーの形態を変える。
銃の形になったイリスカリバーをオットーへ向け、トリガーを引いた。

「ISレイストーム！！」

エネルギーのシールドを出し防ぐが、連射には耐えられない。
壊れるより先にその場から離れるオットー。
だがアトレーも打ちながら追って来た。

「オットー！」

そこに、2本の剣を持ったデイドがアトレーに切り掛かる。

「邪魔だああ！！」

アトレーは今度はデイドに銃を向ける。
デイドは慌てて距離を取り、回避した。

「フォルムアイン」

〔Calibur mode〕

イリスカリバーを再び剣に変え、デイドに突っ込んで行った。
急な攻撃に押されるデイド。

「はあああ!!」

アトレーの連撃にとうとう弾き飛ばされ、アインヘリヤルに叩きつけられる。

「ふっ、まず1」

ドガン!

アトレーの背後に当たった光線。
先程までアトレーが追っていたオットーの物だった。

「きっさつまああああ!!」

今の一撃に激怒し、オットーを睨む。

イリスカリバーを左手に持ち換え、ベルトのバックル部に着いてあるイリスを取る。

「パニッシュ!!」

〔Guilt punish〕

イリスで魔法を発動させる時も音声キーを入力しなければならない。

キーワードを読み取り、イリスの先端に魔力が集まる。

「まずは貴様からだ!!」

右腕を引き、オットー目がけ一気に伸ばした。

だが彼は気付かない。後ろにもう1人敵がいて、剣を構えているのに。

2本のエネルギーで出来た刃が首の前に当たる。

ザシュッ!!

彼が最期に感じたのは自分の首が飛ぶ感触だった。

あの日、失ったのは「自分」。

気付けば俺は炎の中にいた。
何故ここにいるのかも分からない。

ここが何処かも分からない。
自分の事でさえも……。

そしてまた気を失い、目が覚めると別の場所にいた。

周囲には数人の局員。煤塗れの所を見ると、どうやら俺を助けた部隊らしい。

俺以外に生存者はなく、手掛かりも何一つ残っていなかった。

果たして俺は何なのか。

俺に残っていたのは虚空のみだった。

そのご施設に入れられたが、すぐ陸士訓練校に入った。自分を見つける為に。

そこで分かった事は射撃が得意だという事だけだった。

それから卒業後はゲンヤさんにスカウトされ陸士108部隊に配属。記憶は未だ戻らなかったが、自分のいられる場所がある。それだけで十分だった。

彼女とは、俺専用のデバイス「ブレイブアサルト」を作って貰った時にゲンヤさんに紹介された。

「ギンガ・ナカジマです。父がお世話になってます」

「エドワード・クラウンだ。逆に俺がゲンヤさんに世話になっていく。よろしく」

俺は人に心をあまり開かない。初対面の相手にもそっけない態度を

取ってしまう。

「私と同年なんですってね！射撃の腕も優秀だとか！ご両親とかは？局員なの？」

が、ギンガはそんな俺に次々と質問を聞いて来る。

初めて見るタイプだったので戸惑ったが、生憎俺に答えられる事はない。

「……すまない。大した事は答えられない。10歳以前の記憶が無いんだ。親も恐らく死んでいる」

「えっ……？ご、ごめんなさい！」

「気にするな。それより、俺はギンガの話が聞きたい」

俺は家族がどういう物か知らない。だから彼女の話は是非聞きたかった。

「え？でも……」

「頼む。が、話し難いのなら無理しなくていい」

「ありがとう。話せる所だけなら話すけど……」

「けど？」

「貴方の事「エド」って呼んでいい？」

また彼女に驚かされる。

実は俺をそう呼んだのは彼女が初めてだった。

「……好きに呼んでくれて構わない」

その時ギンガに対する印象は「不思議だが、何処か安心させる人物」。

俺には無い物を沢山持っている。

俺の中の常識をいつも壊す。

そんな不思議な人だった。

やがて、俺は彼女を愛しく思う様になった。

たとえ彼女の真実を知っても。

想いが通じ、2人1つになった夜に俺はギンガに問う。

「もし、俺の記憶が戻ったらお前はどつする？俺が犯罪者や異形の者だったら？人格すら違ってお前を傷付けるようなら俺は……」

そこまで言うと、ギンガは俺の口に人差し指を当てる。

「記憶が戻ったとしても、貴方は貴方よ」

「……」

「私を愛してくれた貴方。私が愛した貴方。そしてエドワード・クラウンという貴方が今ここにいる」

「ギンガ……」

「貴方が私を受け入れてくれた様に、私も貴方を……」

唇が重なる。俺は強く彼女を抱き締めた。

この時間が俺にとって偽りの物だったとしてもいい。

俺の気持ちは虚空でも偽りでもないのだから。

「……今思えば、俺は浮かれていたのかもしれない。ギンガが近く
にいて、俺が何時でも守れると。だが実際は……」

自責の念に駆られ頭を抱えるエドワード。

「お前の言う通り、俺は無力だ。不様な姿を晒すだけだ……」
「いい加減にしろ」

力無く呟くエドワードにラウムは冷たく言い放つ。

「お前は、その程度の男か？彼女への想いはその程度か？」
「俺に何が出来る？どの面下げて助けに行けばいいんだ！？」
「……今、ベッドの上じゃなかったら殴っている所だ」

ラウムは立ち上がり、エドワードを見下す。

「弱音を吐いている余力があるなら、さっさと怪我を治せ！それから
助けに行けばいいだろう！」

「……」
「無理ならずっとそこで他人が彼女を助けるのを待っているがいい」
「……」

エドワードは何も言い返すことが出来なかった。
ラウムはコーヒーを買って来ると言って部屋を出ようとする。

「この腑抜けが」

退室間際の最後の一言がエドワードの心を決る。

1人残され、拳を握る。ぶつける場所もない悔しさを必死に抑えながら。

死屍累々とした場所。かつて設置された巨大兵器も無残に破壊されている。

「データ蓄積のおかげで随分楽に動けるッス」

倒れた局員の頭を踏み、肩を回すウェンディ。

「ねっ。オットー、ディード」

「……」

空中にいる姉妹2人に同意を求めるも、無言でそっぽを向かれてしまった。

さっきのアトレーの襲撃に最後まで気付かなかったらしく不満を持たれているのだが、やはりそれすらも気付かない。

「チッ、やっぱりこいつら苦手ッス」

勘違いしたまま腹を立てるウェンディだった。

一方、オットーは顔を向けた先にある物を見つけた。

それは首の無い死体と、横にある籠手の様なデバイス。

祭の幕開けを告げる花火。
白き正義が鈍く照らされる。

次回予告

ソラト「狂気と欲望を乗せて動きだした「ゆりかご」」

エドワード「同時に首都に集まる戦闘機人。その中に……まさか！」

ソラト「六課がいち早く動き出し僕達も、これ以上好きにさせない為に！」

ソラト&エドワード「次回 魔法少女リリカルなのはStrikers others side 第16話 戦闘準備」

ジャック「もう二度と怪しい真似をしない事だね」

第16話 戦闘準備

エドワード「それは、奪われた痛みと己の無力さ」

ラウム「裏で進展する事件は、終末へと加速する」

エドワード「友にも激昂され、醜態を晒してしまう。俺は、俺は…」

エドワード&ラウム「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第16話 戦闘準備

最高評議会。そこで、4人分の話し声がした。
内3つは評議員の物、残り1つはその場にはあまりにも不釣り合いな子供の声。

しかし、幼さとは裏腹に何処か威圧を含んでいた。

「それで、今日は何の御用で？」

「今回の事件、君達が関与してるんじゃないかと思ってね」

暗く、何枚ものプレートが浮いた部屋。

中心には黄色に光る3つのポッドがある。中には、人の脳。

これこそ、評議員3名の正体なのだ。

普通なら目を背けたくなる様な光景だが、その前に位置するプレートに立つ少年は平然としている。

この少年は、旧暦時代に評議会の面々と時空管理局を創設した人物である。

名をジャック・デュアリスという。

「わ、我々は何も……」

「ふーん、そう」

ジャックの納得したような口振りに安堵する評議会。
だが、それはすぐに裏切られる事になる。

「無限の欲望」アンリミットデザインだっけ？」

「……」

「ど、どうしてそれを……」

ジャックが口にしたコードネーム。それは評議会が極秘に生み出し

た存在、まさしく事件の首謀者であるジェイル・スカリエッティの物だった。

このコードネームを知っているという事は、自分達がした事全てがバレている事になる。

「本当なら、君達が脳だけででも生きようとした時点で殺すべきなんだけど……」

彼がコイントスをする度に気を張る評議員達。

評議會は少しでも永く次元世界を見守る為に脳だけで生きて来た。だが、その代償として体が無いため、無防備だ。壊そうと思えばいつでも壊せてしまう。

「長年共に戦って来た情けとその姿への哀れみで生かしといてあげるよ」

ジャックはプレートを動かし部屋を出ようとする。

「けど、もう二度と怪しい真似をしない事だね。もし次やったら……灰にするよ」

本物の殺気を放ち、警告するジャックに評議會は怯えた。しかし、ジャックがいなくなると3人だけの会議を始めた。

一方ジャックは未だに危険視していた。

『昔と比べてすっかり歪んでいる。これくらいじゃ懲りないだろうね。それに……』

ジャックの横を1人の女性が通り過ぎる。3人のポッドのメンテナンス係だ。

優しいような微笑みで礼をしたので、こちらも笑顔で会釈し返した。

『この人も……いや、この人が一番危ないか。何を考えているのか……』

普通好き好んでこんな所にいる筈が無い。何か企んでいると読んでいた。

ジャックのこの読みが当たっており、しかし手遅れになった事を彼が知るのはこの翌日になる。

その頃病院では、エドワードとラウムがテレビでニュースを見ていた。

映っているのは突然現れた巨大な船のような物。

ロストロギア「聖王のゆりかご」である。

「奴等、とうとう動くか」

腕を組みながらテレビを睨むラウム。

と、その時映像が変わった。

「！」

「あれは！？」

映し出されたのは1人の戦闘機人。

ナンバーズのボディースーツを着ているが、2人には見覚えがあった。

「バカな、そんな……」

そこにいたのは、エドワードが助けたいと願っていた人物。

ギンガだった。

瞳の色は黄色に変わっており、無表情でハイウェイを滑走している。恐らく、洗脳されているのだろう。

「居場所は分かったな」

「……………」

冷静に状況を判断するラウムに対し、エドワードは呆然とする一方だった。

「出動命令が出た。俺はもう行くぞ」

「ギンガ……俺は……」

俯いたままのエドワードを冷たい目で見ていたラウムだが、不意に何かを投げ渡した。

「！」

「マリエル技術官によればもう直っているそうだ」

先の戦いで大破したエドワードのデバイス、ブレイブアサルトだった。

「ラウム……」

「これからどうするか、後は自分で決めろ」

それだけ言い残し、ラウムは病室を出て行った。
残されたエドワードは手の中の腕輪を見つめるのみ。

「ブレイブアサルト」

「……………」

愛機の名を呼ぶが、返事はない。

「すまない。俺の無茶でお前を壊してしまった。マスター失格だ」

「……………」

淡々と続けるエドワードだが、やはり返事はない。

「だが、もう一度俺に力を貸して欲しい。ギンガが俺を待っている。
今度こそ、約束を守らなきゃいけないんだ！」

「……………」

「頼む……………」

「……マスター、指令を」

「……」

「私のマスターは貴方しかない。行くのでしょうか？」

「……ありがとう」

ブレイブアサルトを左腕に着け、服を着替える。

「行くぞ」

「了解」

頭の包帯を取り捨て、エドワードは病室を後にした。

「……世話の掛かる」

病室の裏では、ラウムが静かに微笑んでいた。

「エド兄！」

病院の外では、バイクにまたがったソラトが待っていた。

「もういいの？」

「ああ。スバルは？」

「もう行ったよ」

ソラトが指差す先には次元航行艦「アースラ」と六課所有のヘリの姿が。

「俺達も行くぞ」

「うん！」

受け取ったヘルメットを被り、ソラトの後ろに乗るエドワード。エンジンを蒸かし、2人はクラナガンへ向かった。

2人が着いたのは陸士108部隊がいる場所。

「遅えぞ、エド！」

「す、すみません」

着いて早々ゲンヤに怒られた。

「じゃ、エド兄」

「ああ、気を付けろよ」

拳をコツンとぶつけ合い、ソラトは自身の所属する103部隊の所へ行く。

「ギンガは今スバルが戦ってるんだ」

「……分かりました」

そう言つてエドワードは両腕を左腕の上に交差させて前へ突き出した。

そのまま右腕を内側へ入れる様に腕を回し、胸の前へ持つて来る。

「セットアップ」

「Standing by」

すると、左腕の腕輪から出た藍色の帯がドーム状に包み、中からバリアジャケットを身につけたエドワードが現れた。

「2人の決着が着くまで待ちます」

若干悔しそうな顔をし、迫り来るガジェットにライフルの銃口を向ける。

「それまで、コイツ等全てを撃ち墜とします」

放つ射撃に迷いはもう無い。

最後の戦いが今始まった。

次回予告

ソラト「ガジェットを切り捨てていく。そんな中、狂気が再び放たれて」

エドワード「背中を押されて走り出す。向かう先は、大切な者」

ソラト「それぞれの戦いの最中、感じるのは……」

ソラト&エドワード「次回魔法少女リリカルなのはStrike
rS o t h e r s s i d e 第17話 不安と苛立ち」

オットー「僕にはまだ、これがある!」

第17話 不安と苛立ち

ソラト「浮上したゆりかごと集結する機人達。その中には大切な人がいて」

エドワード「覚悟を決めて、再び戦場へ。今度こそ約束を果たす為に」

ソラト「今、最後の戦いの幕が開かれる……」

ソラト&エドワード「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第17話 不安と苛立ち

ヘリポートへ向かう影が2つ。

ヴァイスとザフィーラだ。

ボロボロの体を押して、病院を抜け出して来た2人は、ヘリを拝借して戦場に赴こうとしていた。

だがそれは1人の人物に遮られる事になる。

「2人共何処へ行く気？」

「……シャル」

2人の前に現れた人物、シャルは腕を組んで立っていた。六課の医務官であるシャルにとって怪我人が戦うのは好ましくない。

きつと止めに来たに違いないだろう。

「頼みます、シャルさん！見逃して下さい！」

それでもヴァイスは頼み込んだ。

「俺からも頼む。今回は目を瞑っててくれ」

ザフィーラも頭を下げる。

そんな2人にシャルはため息を吐く。

「医務官として、怪我人を放っておけないわ」

ダメだ。そんな考えが2人の頭の中を過ぎる。

「だから、私も付いて行きます」

しかし、シャルからは意外な答えが返ってきた。

「シャルさん！」

「恩に着るぞ、シャル」

「止めても聞かないんでしょ。ヘリも準備してあるから早く行きましょ」

なんて用意のいい。つい関心してしまうヴァイスとザフィーラだった。

一方、森林地帯にある小さな洞窟。

つい先程ヴェロッサ・アコースが見つけたスカリエッティのアジトである。

ゆりかご浮上後にフェイト・T・ハラウン執務官と聖王教会シスターのシャッハ・ヌエラが中へ向かった。そして、今からヴェロッサも向かうのだ。

「中には戦闘機人のNo.1がいる。彼女を捕まえればかなり有益な情報を得られると思うんだ」

「それまで、この私に護衛をしろと？」

「ああ。頼めるかい？」

白い羽が舞う。中心にいる男の存在感を増幅させるかの様に。

煌びやかな白い騎士服を纏い、髪もそれに相応しく白い。

また腰の後ろに手を回しているが、決して老人という訳ではない。

「友の頼みなら仕方あるまい。大船に乗った気でいるがいい」
「ありがとう、レクサス」

レクサスと呼ばれた男は静かに頷いた。

「ククク……やってるやってる」

上空を飛来するガジェット？型が1機。その上には、デュトロが乗っていた。

「アイツは任務でいないし、殺り放題だな」

腰の剣、エリミネーターを抜き、舌で舐める。
上から見下ろす目には、自らが殺す獲物しか映っていない。

完全に解き放たれた獣が望むのは唯一つ。

殺戮。

「さあて、祭りの始まりだぜ！」

デュトロはエリミネーターに乗っているガジェットに突き刺した。
破壊され、デュトロもろとも墜落して行く。下には地上部隊が。

「な、何だ!？」

突然の上から来襲に驚く隊員達。

逃げる間もなく地面に激突したガジェットの爆発に巻き込まれてしまった。

「よつと」

衝突する寸前で、デュトロはガジェットから離れて着地していた。

「誰だ貴様！？」

「ヒヤハハハハ！ー！皆殺しだあ！！」

有無を言わず、ギリギリ助かった隊員に斬り掛かった。

吹き出す血潮に、喚く悲鳴に、怯えた表情に心が踊る。

デュトロは次々に来る獲物を斬り裂いていった。

「……何体いるんだ？」

エドワードは愚痴を零した。

目の前には同じ部隊の味方。もつと先には金属塊の大群。
何体撃つても一向に減らない。いい加減ウンザリしていた。

『こんな所で油を売っている暇は無いていつのに!』

今、連れ去られて洗脳された恋人のギンガと、その妹のスバルが戦っている。

エドワードは2人への不安と減らない敵への苛立ちを募らせていた。

その時、ゲンヤの方に六課から通信が入る。

「ナカジマ三佐!スバルがギンガを無事保護しました!」

「本当か!?良かった……!」

「!!!」

ゲンヤは安堵の笑みを見せる。

エドワードにも会話の内容は聞こえていた。

「そうか。後はコイツ等を……!」

「エド!」

心置きなく戦闘に集中出来る。

そう思った矢先にゲンヤに呼ばれた。

「何やってんだ!早くギンガの所へ行け!」

「えっ!?!でも……」

何とギンガの元へ行けと言ってきた。

しかし、今抜けると戦況は苦しくなるのは目に見えている。

「ここは心配いらねえ!」

「そうだ！行つてこい！」

「後は俺達に任せろ！」

「迎えに行つてあげて下さい！」

ゲンヤだけじゃなく、周りの隊員達からも促される。

「……………ありがとうございます」

一礼し、エドワードは走り出した。愛する人の元へ。

同時刻、ザフィーラとシャルはオットーを追い詰めた。

今はザフィーラの鋼の軛の中だ。

これで結界は解かれてしまつたが、オットーにはまだ手はあつた。

「僕にはまだ、これがある！」

懷から取り出した物を掌に合わせる。

〔Ready〕

「セットアップ！」

〔Rise up〕

電子音が鳴り、緑色の光に包まれた。

突如、鋼の軛が破壊された。

ザフィーラ、シャル、そしてティアナを助けて戻つて来たヴァイスは目を見開く。

中にいたオットーの格好が変わっているからである。

独特なデザインのバックルと白い鎧、ベルトには刀。
そう、アトレーの持ち物であつたイリスだ。

「まだこんな隠し玉を!？」

「シャル、先に行け。ここは……」

シャルの前に立ったザフィーラの体が光る。
そして、

「俺一人で十分だ」

狼から人の姿になった。

「そんな! 貴方まだ完治して」

「俺より重傷の奴が待っている。早く行け!」

「……分かった。気を付けて」

シャルが乗り込むと、ヴァイスはへりを発進させた。

場に残つたのはザフィーラとオットーのみ。

「……使い魔?」

「守護獣だ」

短い会話の後、拳同士をぶつけ合う。

「借りを返させて貰うぞ!」

拳や蹴りを飛び交わせる、激しい戦いが始まった。

また別の場所では、死体の山が出来ていた。
立つのは1人だけ。この山を作った者だった。

「ヒャーハハハ！楽しいぜ！こんな楽しい事、他にねえ！！」

デュトロは高笑いしていた。
死体の中に壊されたガジェットがあるのは、邪魔だったから斬り捨てたのだろう。

「ハハハ！ん？アイツは！」

道の先に見えた1人の少年に目を付ける。デュトロは彼を知っていた。

「見つけたあ！！」

否、ずっと目を付けていたのだ。
既に血塗れのエリミネーターを構え、デュトロは駆け出した。

「はあ！！」

向かい来るガジェットを真っ二つに斬るソラト。これで何体目になるか分からない。
足元にはスクラップの山が出来ていたが、それでもガジェットは来

る。

無限にいるのではないか？

そついう錯覚まで出て来そうだ。

「スバルは無事だろうか……」

恋人の心配をしていると、背後から人の気配がした。
ただの人間ではない。殺気に満ちている。

咄嗟に剣を構えると、相手も剣を振り下ろしていた。

ガギイン！

鏑迫り合いになる。その時、初めて相手の顔を見た。

黒いボサボサの髪に蛍光グリーンの目の少年で、狂乱的な笑顔を浮かべている。

「君は……誰だ！？」

弾き飛ばし、急襲してきた少年に尋ねるソラト。

「俺かあ？俺はデュトロ・コンマース」

デュトロは再び剣を構え、ソラトも反応して構える。

「お前を殺す奴だ、ソラト・レイグラントおおー！！」

相見えた天使と魔獣。
乱れ咲くは誰が血飛沫か。

次回予告

エドワード「ギンガの所へ急ぐが、ガジェットが邪魔をする。時間が無いというのに！」

ソラト「突然襲ってきたのは狂気の少年。君は何故僕の事を知ってるんだ？」

エドワード「そんな中、俺の前に現れた男。お前は……！」

ソラト&エドワード「次回 魔法少女リリカルなのはStrikers others side 第18話 救いの手を」

ラウム「お前等に俺の罪が裁けるか？」

第18話 救いの手を

エドワード「戦いの最中に届いた恋人の無事。後は迎えに行くのみ」

ソラト「僕の前に現れた野獣は、獲物の血で汚れた牙を向ける」

エドワード「皆に背中を押されて、また走り出す。今度こそ離さない為に」

ソラト&エドワード「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

「お前を殺す奴だ、ソラト・レイグラントおお！」
大声で吠え、再び斬り掛かって来るデュトロ。

「なっ！？どうして僕の名前を！？」

ソラトには目の前の敵との面識は無かった。
斬撃を防ぎつつ、一応記憶を手繰ってみる。

「やっぱ似てるぜ、手前！」

「似てる？誰に？」

ますます混乱する。一体この少年は誰で、何故自分の事を知ってい

るのか。

「今はそんな事、気にせず楽しもうぜ！」

強烈な一撃に弾き飛ばされる。

ふと、足元にある妙な感触に気付いた。液体の様だが、ドロリとしている。

そして、異臭。

血だ。

ソラトの周囲は大量の死体が転がっていた。

「これは……」

「ああ、俺が殺った」

「……!?!」

ヘラヘラと笑いながら、デュトロは平然と言い切った。

「楽しかったぜえ。お前もこの内の1つになるんだよお!!」

デュトロが襲い掛かる。だが、ソラトは身動き1つせず、その一撃を防いだ。

「君は、人の命を何だと思っているんだ!!」

怒りに満ちた眼差しを向け、デュトロを押し返す。対するデュトロは恐れるどころか嬉々としていた。

「いいねえ。そうでこそ面白え!!」

頭の中の疑問を全て振り払い、今はただ目の前の敵を倒す事に集中する。

「鎮魂歌は歌い終わった？」

怒れる天使と狂気の魔獣は、刃を交えて踊る。

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第18話 救いの手を

スカリエッティのアジトの最奥。そこにナンバーズの長姉、ウーノがいる。

数多くの情報を握っている彼女がいる部屋を、ヴェロッサがとうとう見つけ出した。

途中にはまた多くのガジェットがいた。今もガジェットが向かって来る。

しかし、飛来した何かに斬られていく。
当たらなかつた機体も、無数の白い羽が刺さり破壊される。

「我が友は送り出した。ここを通さないのが私の役目」

白い羽が舞い落ち、静かに挙げた手には先程飛来した物、ブーメラ
ン。

「降臨、満を持して……」

優雅な雰囲気醸し出しながら、圧倒的な強さで次々とガジェット
を葬る。

その上、彼には傷一つ付いていない。攻撃を確実に避けながら戦っ
ていた。

「私に刃を向けた事を悔いるがいい！」

聖王教会騎士団、レクサス・インフィーノ。それが彼の名。

結果、ヴェロッサがウーノを捕まえ戻って来るまで、レクサスは無
傷だった。

エドワードは1人で走っていた。

以前にもこんな事があつた様な気がする、と考える。
市街地を走り、着いた先で恋人の名を呼び、結果何事もなく恥をか
いた。

今は違う。彼女は自分を待っている。

だからこそ、止まらずに走り続けていた。

だがしかし、周囲から物音がする。前と後ろ、計4体のガジェット？型が姿を現した。

「こんな時に！」

周りを見渡せば、既に囲まれている。

不意に左腕に走る痛み。どうやら左腕は無茶出来る程治ってはいない様だ。

「逃げられないらしいな」

エドワードは諦め口調でライフルを構えた。

ドガッ！！

が、突然廃墟から何者かが飛び出し、前にいる2体を蹴り転ばせた。

「大丈夫か？」

「ラウム……」

エドワードの前に現れた男、ラウムはエドワードの後ろに立ち、右腕を広げた。

「行け」

「！？」

「お前には、行かなければならない所がある」

「……恩に着る」

エドワードはラウムの開けた道を走って行った。

追おうとするガジェット。だがラウムが立ち塞がる。

(戦闘BGM: EGO's eyes grazing over)
/ ICHIDAI)

「さて、お前等に俺の罪が裁けるか？」

ラウムは胸ポケットから懐中時計を取り出すと、左胸の前にかざし手首を回す。

「セットアップ」

発声すると同時に時計のボタンを押し蓋を開かせる。

[Standing by]

すると、時計の針が回転し帯状魔法陣が現れラウムを包む。
そして中から、灰色の上着の上に黄色いラインが入った青のジャケット、黒いズボン姿のラウムが登場した。

「悪しき魂、天へ昇れ」

台詞と共に手に持つ槍、ガーゴイルでガジエツトをまず1体切り裂く。

慌てて他のガジエツトが応戦するが、素早い動きで翻弄する。

「ガーゴイル！」

〔Wyvern spike〕

ラウムはガーゴイルに呼び掛け、構える。

勢い良く突き出すと先から魔力が槍の様に放出され、ガジェットを2体貫通させて葬った。

「終わりだ」

〔Charge〕

後ろにいたガジェットに振り向くと、すぐにバインドを掛け魔力を溜める。

〔Buzzu strike〕

身動きのとれないガジェットの中心にガーゴイルを突き刺す。

ガーゴイルを抜き、後ろに振り返って一振りすると、ガジェットは爆散した。

ガジェットは全滅させた筈だが、ラウムは未だに槍を構えている。

「……まだ、いるな」

「ああ。確かに」

ラウムの言う通り、建物の陰からガジェットが何体も出て来た。

「行くぞ」

「了解！」

ラウムは襲い来るガジェット軍団を迎え撃った。

市街地の上では人型となったザフィーラとイリスを装着したオットーの殴り合いが行われていた。

「硬いな」

バリアジャケットや騎士甲冑と違い、イリスのそれは完全な鎧。防御が硬く、中々致命傷が与えられない。

それにオットーのIS「レイストーム」も厄介だった。

シールドを出しつつ発砲からの光線。1本1本は大した威力はないが、まとめて食らえばキツイ。

「鋼の軛いい!!」

下方から伸びる魔力の刺も、鎧姿に似合わず軽々と飛び躲かれてしまふ。

ともなればザフィーラの勝機は唯一つ。単純な力での圧倒だ。ISを使わせない程の猛攻で押せば勝てるかもしれない。

「こちら手負いの身。時間は」

その時、オットーはバックルを手にとった。籠手の様なデザインだ。

「パニッシュ」

〔Guilt punish〕

バックルに音声入力をし、腕を引いてこちらに拳を伸ばした。すると、魔力の塊がバックルから出て来たのだ。

「なっ!?!」

慌ててシールドで防ぐ。まさかこんな技があったとは。どうにか防ぎ切ったが、至近距離で射たれればアウトだ。

「余計に早めに終わらせねば！」

ビーン！ビーン！

「う、あああああ！？」

突如、警告音が鳴り響き、オットーが苦しみ出す。

全身から煙を吹き、やがてビルの上へ落下していった。

「……？」

ザフィーラにも何が起きたか分からなかったが、一先ずオットーが落ちた所へ向かう。

イリスは解除されており、倒れたオットーの横にバツクル、イリス本体だけが残っていた。

「な、にが……？」

2人はイリスのリジェクションの事を知らなかった。

イリスには限界使用時間があり、30分以上使用すると強制解除される。

リジェクションで体力を大幅に削られ、落下の衝撃で更にダメージ

を負ったオットーは、訳が分からないまま気絶した。

また1つ、戦いに決着が着く。

祭の終わりは近い。

次回予告

エドワード「ついにギンガと再開する。…何を話していいのかわからない」

ソラト「目の前の少年に苦戦してしまう。こうなったら……！」

エドワード「背後には別の科学者の暗躍が。…何だ？あれもガジェットなのか!？」

ソラト&エドワード「次回 魔法少女リリカルなのはStrike
ers others side 第19話 守るものの為に」

エドワード「少し、待っててくれ」

第19話 守るものの為に

ラウム「長き「祭」に、終わりが近付く」

ソラト「無残な被害者達を背に、凶悪な獣に怒りを募らせる」

ラウム「そして送り出した友は、自分の使命を果たす時が」

ソラト&ラウム「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第19話 守るものの為に

市街地でガジェットを破壊する少年が1人。
シビック・ラグレイトだ。

[Freeze scratch]

「はあああ!!」

シビックは氷の爪を飛ばし、目の前のガジェットを斬り裂いた。

「ふう……こんなとこかな」

周囲にガジェットがない事を確認し、歩き出す。

「ヒヤッハアアア!!」

だが、聞き覚えのある笑い声に再び警戒心を強くした。

「この声……アイツだ!」

地上本部襲撃時に自分を倒した奴、デュトロの物だと気づき、シビックは声のした方へ向かう。

しかし、そこにはもう1人見知った人物がいた。

「どしたあ?もつと楽しませろよ!」

「くっ!であああ!!」

「ソラト・レイグラント、どうしてお前が……」

今までずっと倒せなかった、ただ一人の男。
ソイツに、標的まで奪われてしまっている。

「アイツは僕が倒すはずだったのに……！」

シビックは2人の戦いを悔しそうに見るしか出来なかった。

シャマルと、抱えられたギンガは飛び立つヘリを見送っていた。
ゆりかご内部に閉じ込められたなのは達を救う為に、スバルとティ
アナ、ヴァイスが向かったのだ。

「私達も行きましょうか」

丁度到着した医療班の救急車へ運ばれそうになるギンガ。

「待って下さい。誰か、来る様な気がするんです」

ところが、それを制した。

事情が分からない医療官達は首を傾げる。

「分かったわ。待ちましょう」

だが、シャマルだけは微笑んで了承してくれた。

車が見える。何人かの人も見える。
その中の1人は抱き抱えられた女性。俺がずっと会いたかった人。
走り続けた意味があつた。
だからこそ、俺は彼女の名前を叫ぶ。

「ギンガああああ!!」

彼女は気付き、涙を浮かべて叫び返してくれた。

「エドおおお!!」

疲れも、腕の痛みも気にせず、俺はゴールまで走った。

「オラオラどうしたその程度か!!」

ソラトはデュトロの素早い攻撃に翻弄されていた。

「はあああ!!」

何度も剣を振るが、ことごとく避けられていく。
一方デュトロはビルの壁から壁へ飛び、柔軟に斬り掛かって来る。
何とか防いだり避けるが、擦ってしまい体力をを徐々に削られた。

「ぐあああっ!?!」

とうとう、弾き飛ばされて片膝を地に着く。

「チッ、もう終わりかよ」

「セラフィム!!」

[Wing form]

ソラトの声に呼応して、セラフィムは形態を変える。

「ん？」

刀身からはホバーゆり煙が吹かれ、ソラトの足元は少し浮いている。

セラフィムのフォルムツヴァイ、ウイングフォルムだ。

ソラトは滑る様に素早く動き、あっという間にデュトロの後ろに回り込む。

「はああああ!!」

ホバーによつて剣の振るスピードが上がり、デュトロに漸くダメージを与えられた。

「チッ……ヒヤハハハ!そこなくっちゃな!!」

痛みに顔を歪ませたが、また殺し合いを楽しむ笑いに変えるデュトロ。

戦いはどうやら、まだ終わらない様だ。

暗い研究室。スカリエッティのラボとは違う場所。
マラネロがこの「祭」をずっと観戦していた。

「スカリエッティもあつけない。よりにもよってナンバーズ全員倒され、聖王まで奪い返されるとは」

眼鏡をクイと上げると、1つのスイッチを押した。

「けど、タイプゼロは2つとも返して貰うよ」

エドワードとギンガはお互いに黙っていた。掛ける言葉が見つからないらしい。

ずっと会いたかったのに、いざ会うと何を話していいのやら。
おまけにギャラリーまでいる。気恥ずかしさで俯くしかなかった。

『さっき叫んだのは間違いだったか……？いや、何の為にここまで来たんだ！？』

勇気を振り絞り話し掛けるエドワード。

「……ギ」

ズドオオオオン！！

しかしそれを、突然の地響きが邪魔した。

「な、何だ！？」

「今のは一体……！？」

戸惑う医務官達。その中の1人が指差し大声を上げる。

「何だあれは！？」

その先にいたのは巨大な機械。上半身は人型で右腕には鉄球、下半身は4本の足がある。

強固そうな装甲の隙間から蒸気を吹き、頭部は何かを探す様にキョロキョロ動いていた。

「デカイ……」

「改造ガジェット、ってとこかな。ウヒヤヒヤッ」

その改造ガジェットの送り主であるマラネロは満足そうに笑っている。

「ファースト以外は……潰せ」

「ター……ゲット……タイ……プ・ゼロファース……ト。ホカハ……ハイジヨ……」

改造ガジェットはエドワード達に気付くと上半身を回転させて向き合い、近付いて来た。

「避難している」

パニックに陥る医務官の前にエドワードが立つ。

「エド！」

エドワードはギンガを抱えている女性、シャマルに話し掛けた。

「頼みます、ギンガを連れて」

エドワードが言い終わる前に、シャマルはギンガを後ろに降ろし、エドワードの隣に立つ。

「貴方、エドワード君ね」

「どうして俺の名を？」

「あ、私、六課の医務官のシャマルっていいます」

こんな状況なのに、シャマルはにこやかに自己紹介をし、エドワードも軽く会釈する。

「貴方の事はギンガから聞きました。それより、貴方は入院中だっ

たはずよ」

「……………」

「だから、私も手伝います」

「……バインドに自信はありますか？」

「多少は」

「……頼みます」

「はい！」

向かって来る改造ガジェットにシャルマルはバインドを張り巡らせる。

「ギンガ！」

不意に呼ばれたギンガはビクツとなりながらもエドワードを見る。

「少し待っててくれ」

「……勿論よ！」

いつものエドワードに、ギンガは安心していた。

「ブレイブアサルト、フルドライブ！」

「Burst form、awakening！」

エドワードの掛け声に反応して、ブレイブアサルトがライフルから長距離砲へと姿を変える。

「チャージに時間が掛かります。それまで持ち堪えて下さい！」
「分かりました！」

一本一本バインドが引き千切られるが、新たなバインドがガジェットを縛る。

魔力チャージをするエドワードだが、大きくなったブレイブアサル
トを上手く支える事が出来ない。

「左腕がつ……！」

「マスター！？」

やはり、左腕が痛んでいた。このままでは発射出来ない。
無理をしてもエドワードは長距離砲を支えようとした。

その時、他方からの力が働く。後ろを向くと、ギンガが左側を支えていた。

「ごめん、待てなかった」

「……お互い様だ。頼めるか？」

「ええ。私はいつでもエドを支えてるんだからっ」

チャージを終え、ロックオンする。

ガジェットが右腕から鉄球を飛ばすも、シャマルが防いだ。

「もう、持ち堪えられません！」

今のシールドに力を注いだ所為で、バインドがどんどん千切られる。

俺は約束を守れなかった。

お前は俺を呼んだ。助けを求めた。

だが、腑甲斐なくも俺は助ける事が出来なかった。

だから、俺は守るものの為に今度こそ！

「撃ち墜とす！！！」

〔Area destroyer〕

ズドオオオオオン！！

ミシッ！ミシミシッ！

「ぐっ！！」

長距離砲の反動に耐え切れず、エドワードの体が悲鳴を上げる。

放たれた魔力の塊は改造ガジェットの中心に命中し、大爆発を起こす。

最後に蒸気を吹き、爆炎に包まれて轟音と共に崩れ落ちるガジェット。

「やりましたね！」

歓喜の声を上げるシャマル。だが、それはすぐに不安へと変わった。

「エド！」

エドワードは口から血を吐き、地に手を付いていた。左腕はだらしなく垂れ下がっている。

「大丈夫だ……」

何処からどう見ても大丈夫ではない。

ブレイブアサルトを腕輪に戻すと、よろけながらも立ち上がる。

「約束は……果たしたぞ……」

そして、ギンガに抱き付く様に倒れこんでしまった。

「……おかえり……」

「……うん、ただいま」

必死に絞り出した一言と涙ぐみながらの一言。

戦士は愛する者の胸の中で眠った。

次回予告

ソラト「戦いを早く終わらせる為、僕は切り札を出す！」

エドワード「暗躍する科学者は今度はスバルを狙う……」

ソラト「ついに、長かった事件が終わりを迎える」

ソラト&エドワード「次回 魔法少女リリカルなのはStrike
ers others side 第20話 切り札」

ソラト「お前はここで、僕が倒す！」

第20話 切り札

エドワード「待っていた愛しき者との再開を楽しむ間を与えず、現れた巨大な敵」

ギンガ「撃破と引き替えに眠る貴方の精一杯の「おかえり」に「ただいま」を」

エドワード「事件も終わりを告げる時、一つの死闘にもまた決着が」

エドワード&ギンガ「魔法少女リリカルなのはStrikers
others side 始まります」

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第20話 切り札

剣と剣が打ち合う音。時々狂った笑い声。

今やあらゆる場所で決着が着いているというのに、ここではまだ戦

いが繰り広げられていた。

「はああああ!!」

「でりやああああ!!」

ソラトはウイングフォームでのスピードで相手を翻弄している筈だった。

ところが、デュトロは反応しきっている。

「いいねいいね!! 最っ高だぜ!!」

暴れる事以外何も考えていない。殺戮本能だけで動くデュトロに、ソラトは怒りを覚える。

「君はそんな事をして、本当に楽しいのか!？」

[Ascension lance]

頭上から降り注ぐ槍の雨を、デュトロは剣で碎いていく。

「ああん？」

「人を殺して、何も感じないのか!？」

ソラトの言葉に、口を歪ませるデュトロ。明らかに不機嫌になっていた。

「ゴチャゴチャうるせえよ!!」

「なっ!？」

「楽しいねえ! 感じるとしたら狂乱的な楽しみだけだ! 戦って、殺して、破壊して、混乱を招く!」

この人は本気で言っているのか？ソラトは耳を疑った。

「んでよあ、綺麗な事ばかり言っていると標的変えっぞ？そうだなあ、お前の彼女とかさあ！！」

ピクッ！

彼女、という言葉にソラトが反応した。

「ソイツの四肢引き千切って、顔とかズタズタに斬り裂いて手前にくれてやるよ！ヒヤハハハハ！」

コイツだけはスバルに会わせてはならない。ソラトの中の本能が叫ぶ。

「見せてやる……僕の切り札！」

一方、何処かの研究室。

「あらら、アレが壊されちゃったか」

マラネロが多少残念そうな表情を見せる。

「仕方ない。セカンドだけでも持って帰らせるか」

キーボードを打ち込む。

モニターに映し出されたのはゆりかご内にいる人物。

スバル・ナカジマだった。

(戦闘BGM：ELEMENTS/RIDER CHIPS Featuring Ricky)

「見せてやる……僕の切り札！セラフィム！フルドライブ！」

「Sacred form、awakening！」

ソラトの剣、セラフィムが光り、ソラトの体が宙へと浮かぶ。

刀身のホバーが無くなり、ポメルの部分まで真つ二つに割れ、片方が180度回転する事で両端に刃がある型になった。

そして、ソラトの背中からは左右合わせて8枚の青緑色の翼が生えた。

これがセラフィムのフルドライブ、セイクリッドフォルムである。

「スバルには絶対に会わせない！」

翼を広げ、双刃の剣を構える姿は「熾天使」の名に相応しい。

「そうこなくっちゃなあ！」

「お前はここで、僕が倒す！」

ソラトは一気にデュトロへと飛んだ。ウイングフォーム程のスピードは無いが、力が増している。

デュトロはバク宙でそれを避けると、近くのカジエツト？型の上に乗り、空を飛ぶ。

「これでイーブンだ！」

お互い何度目になるか分からない剣の打ち合いを始める。
縦横無尽に空を飛び回り、より激しく。

「ヒヤハハハハ！」

目の前には人の命をどうとも思わない極悪非道の獣。
その後ろにはゆりかご。中では大切な想い人が戦っている。
こんな奴に負けてはいられない。

「うおおおおっ！」

ソラトはデュトロに斬り掛かり、そのまま押し切った。

「何い！？」

デュトロは地へ落ち、足場だったカジエツトは真つ二つになった。

「チッ！だがこの程度で」

着地したデュトロは目を見開いていた。太陽の光を背にした天使の姿。

「これで終わりだ！」

[Seventh heaven]

突き出した両腕の先には7つの魔法陣が輝いている。

対するデュトロはエリミネーターの切っ先に魔力を集めた。

「なめんなあ！！スローター」

「セブンスヘブン！！」

ドシューウウウ！！

デュトロが技を出す前に、魔法陣からそれぞれ、計7つの砲撃が放たれた。

「ぐっ……！ちつくしょおおおお！！」

巨大な砲撃を前に有りつただけの斬撃波を放つが、虚しくもデュトロもろとも飲み込まれてしまった。
咆哮と共に爆音が鳴る。

「はあ、はあ……」

ソラトは息切れしつつも地上に降りた。

「倒した、か……」

膝を付き、休むソラト。体は傷だらけで体力も限界らしい。

砲撃の後にはエリミネーターらしき残骸が残っていた。

全てが終わり、無人のゆりかごから離れるヘリが一機。
中には戦い疲れて眠る者達と、それを見守る者達。

その遥か後ろから数機のカジエツト？型が追っている。
ヘリ目がけてレーザーが放たれようとしていた。

ところが、カジエツト達は向きを変え、ある一点に集中放火した。
そこには猛スピードで接近する者がいた。

「スバルに手を出すなあああ！！」

ソラトだった。

カジエツトのレーザーを食らい、体中に更に傷を負うが、その速さは衰えない。

カジエツト部隊のど真ん中に入ると両腕を広げ、周囲に7つの魔法陣を展開させた。

「セブンスヘブン！！」

そのそれぞれから砲撃が放出され、瞬く間にガジェット部隊は一掃された。

「スバル……」

へりに向かい優しい笑顔を浮かべた後、傷だらけになったソラトは落ちて行った。

「ソラト……」

へりの中で、スバルは幸せそうに寝言を言ったという。

「はぁ、はぁ、クソッ！」

暗い廊下を歩くデュトロ。実は生きており、何とか逃げ帰れたのだ。しかし、体は既にボロボロで出血も酷い。完全な敗北だった。

「ソラト・レイグラント……次は必ず」

「必ず……何だ？」

デュトロの前に現れたのは、任務を終えて帰って来た謎の少年。

「殺すんだよ！アイツの所為でこの様だ！エリミネーターまで失くしちゃった！」

「ソラトは俺の獲物だと言った筈だ」

「知るか！」

負けたのが余程悔しかったのか、苛立ちを露にするデュトロ。

「だが、お前のお陰で随分と奴のデータを集められた」

少年の言葉にデュトロは更に怒った。

「ムカつくんだよ！テメーの面も！いいか、アイツを殺るのはこ」

ズバッ！！

次の瞬間には、デュトロの胸から上が失くなっていた。
何時の間にかデュトロだった物の後ろに少年がいた。

「ソラトは俺が殺す。貴様の役目は終わりだ」

碧色の髪が揺れ、血濡られた大剣を振る。

「あーあ、彼にはまだ働いて貰おうと思ってたのに」

マラネロは一連の出来事をモニターで見ていた。
仲間が死んだというのに至って冷静である。

「ま、いつか。それよりタイプゼロの事だけど」

軽く言い放ちモニターを切った後、自身の作業に戻った。

戦い疲れ、安らかに眠る戦士達。
長き悪夢の事件は終結した。

次回予告

ソラト「事件が終わり、漸く平和な時が戻る」

スバル「怪我也、大切な人が傍にいたら、きっとすぐ治るよね」

ソラト「星空を見上げ、また新たな始まりを待って」

ソラト&スバル「次回 魔法少女リリカルなのはStriker
S o t h e r s s i d e 第21話 空色の約束」

スバル「2人だけの、約束だよ」

第21話 空色の約束

「聖王のゆりかご」の破壊、そしてJ・S事件解決から1カ月が経ちました。

事件の後始末も終わり、皆平和に暮らしているみたいです。

怪我を負った人達も、徐々に回復に向かっています。

でも、心に負った傷はまだまだ時間が掛かるみたいです。

ナンバーズの半数以上が更正施設へ、残りトスカリエッツィは別々の留置所に収監されました。

……へ、僕ですか？

僕は今、まだ入院中です。

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

第21話 空色の約束

聖王病院、ソラトの病室。

そこに、患者であるソラトの他にもう1人いた。

「ありがとう、シビック」

同じ陸士103部隊であり、自称好敵手のシビックである。

彼はここに来るつもりはなかったが、ソラトが呼んだので来たのだ。

「ふん、何の事かな？」

「色々。まだお礼言ってなかったし」

ソラトがデュトロを倒した後、シビックはソラトに近付いた。

「随分と疲れてるね、ソラト」

「シビック？」

シビックは嫌味な笑みを浮かべ、ある箇所を指差した。

「あそこに六課のヘリがあるけど、後ろからガジェットに狙われて
いる」

「！-！-」

「どうやら、あれには君の力の根源がいる様だ」

シビツクの言う力の根源。それは以前自分が言った守るべき人。

すなわち、スバル。

「このまま見殺しにしても」

「うああああー!!」

シビツクが淡々と話していると、ソラトは大声をあげ立ち上がった。
8枚の翼を広げ、ガジェットの元へ一直線に飛んで行った。

「スバルに手を出すなああー!!」

「あの傷で……馬鹿だね」

シビツクは、嫌味の途中で飛び出したソラトに呆れていた。

「あの時スバルが危ないのを教えてくれた」

「まさか本当に行くとは思わなかったよ」

「その後も……」

「スバル……」

全ての力を出し切り、ボロボロになったソラトは地へ落ちて行った。

「あんな所から落ちたら死ぬぞ!？」

シビックは慌ててソラトが落ちて来る場所へ走った。

「まだ死なれたら困るんだよ!」

ドサッ!

間一髪、シビックはソラトをキャッチした。

ソラトは気を失っていて、ピクリとも動かない。

「……チッ」

舌打ちをして、シビックは救護班を呼んだ。

「僕を助けてくれたって聞いたよ?」

ソラトの呑気な笑顔にますます苛立つシビック。

「勘違いしないでくれるかな。死なれたら困るだけだ。君を倒す理由も1つ増えたしね」

それだけ言い放ち、シビックは病室を出た。

別の病室では、エドワードがベッドに横たわっていた。

エドワードは無理が祟り、再び病院送り。全治2カ月となった。

「窮屈なものだ」

天井を見上げ、ポツリと呟く。左腕はギプスで固定されて動けない。他にも全身に包帯が巻かれている。

唯一動かせる右手には、ラウムの見舞い品の本があった。

「自業自得、です」

隣に置かれているブレイブアサルトからの厳しい声に黙り込む。

それでも、エドワードは後悔してなかった。

最愛の人を救う事が出来たのだから。

実はギンガも同室、つまりは2人きりであった。

因みに、当のギンガは

「エド、林檎剥けたわよ」

既に元気になっていた。明後日退院の予定だ。

「はいエド、あーん」

「なっ、何を!？」

「何って、食べさせてあげようと思って」

「は、恥ずかしいだろ!」

2人きりという事で、ギンガは思い切り甘えて来た。

「いいじゃない、誰も見てないんだし」

「ブレイブアサルトとブリッツキヤリバーが」

「我々の事はお気にせず」

「どうぞお楽しみ下さい」

「ほら」

「……………」

結局、食べさせてもらう事になった。

「エド」

「何だ？」

突然、ギンガが呼び掛ける。

「ありがとう、来てくれて」

「……………」

「私、来てくれるって信じてた。だから、貴方が見えた時ホツとした」

「……………すまない」

「え？」

ギンガの話を遮り、俯いていたエドワードが謝罪した。

「遅くなった。本当なら連れ去られる前に助けて」

そこまで言うと、ギンガに口を塞がれる。

「それで無理して、こうなっただけでしょ」

「……………」

「なら、謝るのは私の方じゃない。私の所為で貴方が傷付いたのだから」

「違う！それは俺が勝手に」

「じゃ、おあいこって事で」

笑顔を向けるギンガに、エドワードはやはりかなわない、と思った。

「エド」

「ん？」

「……………何でもない」

再びソラトの病室。こちらにも、また見舞いが来たようだ。

「ソラト」

「スバル！」

最愛の人が来て、ソラトの心も跳ね上がった。
ベッドの横の椅子にスバルが座る。

「前と今度は逆だね」

「うっ、あはは……………」

スバルの黒い微笑みとその一言にソラトは苦笑する。

「心配したんだよ？無茶したって！」

「う、ごめん……………」

どうやら、ソラトがスバルの乗ったヘリを助ける為にボロボロにな

った事は聞いていない様だ。

「うん、許す」

「ありがとう」

互いに笑顔を向ける。

「果物持って来たんだ。食べる？」

「うん。ありがとう」

それから、2人は色々な話を話した。

「ねえ、今度海に行こうよ！」

「いいね！スバルと僕、エド兄やギン姉と4人で！」

「え？う、うん……」

『本当は2人で行きたかったんだけど……』

平和な時はすぐに過ぎ、あつという間に夜になった。

「スバル」

「何？」

「僕はまだまだ無力だったと思う。今回も、ガジェットを斬るだけ。スバルの助けになれてなかった」

星々が浮かぶ夜空に拳を突き出すソラト。

「だから、もつと強くなる！君を守る為に！そして今は届かないけど、いつかなのはさんを越える！」

決意を語るソラトを、スバルは微笑んで見ていた。

「じゃあ、そんなソラトを私が守る」

「えっ！？」

スバルの発言にソラトは驚いた。

「だって、ソラトが入院したって聞いた時すごい怖かったんだよ！？」

「スバル……」

「無理してまた落ちない様に、私が守る」

スバルの真っ直ぐな瞳に、頬を赤くしながらコクリと頷いた。

「2人で守りながら、2人で飛んで行く道」

「2人だけの、約束だよ」

ねえ 出会ったあの日の

最初の言葉 今も覚えてるよ

そう まっすぐな瞳

あの頃からね 変わらずにいるよね

信じた道 駆け抜けていつて

あなたのゆくその道を

わたしがどうか守れますように

星の夜空 誓い合った 叶えたい夢と憧れ
手をのばしてもまだ 届かない星も

あきらめない 信じたから どこまでも高く飛べるはず
描いた夢への道 あの空にとどけ

(ED:空色の約束/スバル・ナカジマ(斎藤千和))

魔法少女リリカルなのはStrikers others side

完

エピソード

エピソード

聖王教会。

J・S事件を予言した騎士、カリム・グラシアが事件後初めて彼女
レアスキル
の稀少技能、「預言者の著書」プロフェーティン・シュリフテンを発動していた。

地上本部では改めて予言の重要性を考え、解読に力を入れる事になっている。

「これは!？」

書かれていた内容に激しく驚愕するカリム。
直ぐ様、三提督に知らせに行った。

造られし異形の者達、七つの罪を集める

集う戦士達の悲しみは、過去より訪れ試練となる

罪揃う時、現れし王の星が世界を変える

王に使いし者達が運ぶは、支配なり

悪夢はまだ終わらない

物語は漸く、始まりを迎える。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d

W
a
r
r
i
o
r
s

エピローグ（後書き）

こんにちは、銀です。

StS o sを御覧頂き、ありがとうございます。

この小説は2008〜2009年に執筆したものです。
多少推敲してますが、ほとんどがそのままなので、読みにくい部分もあると思います。すみません。

さて、今回で明かされてない謎がいくつかあります。

科学者マラネロの目的は？

謎の少年の正体とは？

カリムの予言の意味は？

全ては現在執筆中の「魔法戦記リリカルなのはWarriors」
で明らかになります。

ソラトやエドワード達、ちょっとだけ登場したジャックも活躍します。

是非御覧下さい！

こちらの方でも感想お待ちしてます！では！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0959y/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS others side

2011年11月12日00時39分発行